

2018年度

龍谷大学短期大学部こども教育学科教育年報

「うまれる・育つ・生きる<いのち>」  
プロジェクトを中心にして

2019年3月30日

龍谷大学短期大学部こども教育学科

## 目次

|     |   |                       |    |
|-----|---|-----------------------|----|
| 1.  | 巻頭言   | 中根 真                  | 1  |
| 2.  | 実習指導授業における「うまれる・育つ・生きる<いのち>」<br>プロジェクトのねらいと概要 | 田岡由美子                 | 3  |
| 3.  | 保育者養成教育における仏教讃歌の実践                            | 羽溪 了                  | 8  |
| 4.  | 実習指導授業において取り組んだ仏教讃歌合唱に対する学生の意識                | 田中知子                  | 12 |
| 5.  | 映画「うまれる」の鑑賞 鑑賞前後のアンケート結果より                    | 赤澤正人                  | 18 |
| 6.  | 映画「ずっと、いっしょ」の鑑賞 鑑賞前後のアンケート結果より                | 赤澤正人                  | 23 |
| 7.  | 内田美智子先生 講演「いのちをいただいてつないでいくこと」                 | 野口聡子・星野繁一・内田眞理子       | 29 |
| 8.  | おいでよ！ちびっこまつり                                  | 野口聡子・内田眞理子            | 31 |
| 9.  | 知的障害児・者施設での実習に向けての事前指導                        | 武岡ゆかり                 | 35 |
| 10. | 学生の気づき、教員の気づき—母子生活支援施設についての授業を通して—            | 堺 恵                   | 39 |
| 11. | 子どもの“生きる”にかかわる保育者の在り方—保育指導案を通して—              | 齊藤真由美                 | 44 |
| 12. | からだで感じる遊びの大切さ—模擬保育を通して—                       | 野澤良恵                  | 48 |
| 13. | 実習生の意識の変容を促すマナー指導                             | 土井由美                  | 52 |
| 14. | 実習サポート講座 ～名札づくりにチャレンジしよう！～                    | 辻友理・松原亜朋衣・中原巳紗子・田岡由美子 | 55 |
| 15. | 自分を大切にするために                                   | 赤澤正人                  | 58 |
| 16. | 2018年度「うまれる・育つ・生きる<いのち>」プロジェクト<br>最終アンケート結果報告 | 松溪智恵                  | 61 |

## 巻頭言

中根 真

こども教育学科が設置されたのは2011年4月です。以来、8年間にわたって教育を展開してまいりましたが、このたび『2018年度 龍谷大学短期大学部こども教育学科教育年報「うまれる・育つ・生きる<いのち>」プロジェクトを中心にして』を作成いたしました。

こども教育学科が掲げる保育者養成教育の特色の1つは、「やりっぱなしにしない実習教育」です。保育士、幼稚園教諭二種免許状の両方の資格・免許状を取得するには2年間に5回（およそ50日間）の実習を経験しなければなりません。真の学びは実習後に始まると考えています。

実習は、学生たちにとってみれば、不慣れな実習園・施設の現場に飛びこみ、緊張や気遣いのなか、保育者の仕事の実際を学んでいく貴重な学びの機会です。こどもや利用者と直接関わる仕事はもちろんですが、こどもや利用者とは直接関わらない、いわば裏舞台の仕事など、大学入学前に描いていた仕事のイメージと実際のギャップに少しずつ気づいていきます。

こうして学生たちが苦労の末、大学に持ち帰ったさまざまな経験や気づき、発見、疑問などは、まさに「ダイヤモンドの原石」の山です。磨けば光る、輝く原石をどのように取り扱うかは、私たち教員集団の力量や技量が問われる場面です。

実習期間中に毎日作成する実習記録をはじめ実習総括レポート、そして、大学での学生同士の実習ふりかえりの話し合いや議論、実習報告会での発表（レジュメ、ロールプレイ、映像等）、フロアー参加者（学生や教員、卒業生）との質疑応答などを通じ、個人、グループ、学年全体で磨きをかけていきます。

もちろん、単純明快な答えが導けることはほとんどありません。ただ、提起された問題に対し、一人ひとりが向きあい、「こんな見方もあるし、あんな見方もある。さらに、別の見方もできる…」と多面的・多角的な思考を巡らせながら、問いを抱え、考えつづけるしかないという結末を迎えます。誰もが正解は何なのかと問いたくなりますが、学生も教員もそれを軽々に導けないことに気づいていきます。ふりかえりの営みを通して、保育や支援の奥深さと難しさを実感する、実に豊かな時間であると思います。

ところで、この教育年報は、以上のような実習教育を担う教員一人ひとりもまた自らの教育を「やりっぱなしにしない」というねらいから、自主的に作成されました。内容は、2018年度に実施した「うまれる・育つ・生きる<いのち>」の教育プロジェクト（2018年度学部教学充実費による事業）において、各教員がそれぞれ担当した教育内容、あるいは関連するアンケート結果の分析を通して、その意義と課題を見極めようとするものです。教員個々の省察の積み重ねが次年度以降の教育の見直しや刷新（イノベーション）につながればと考えております。

巻頭にあたり、この教育年報のねらいを少しばかりご紹介しました。在学生をはじめ受験生、保護者のみなさまにご覧いただければ、こども教育学科における教育のいまを感じてい

ただけるのではないかと思います。みなさまから忌憚のないご意見等をお寄せいただければ幸甚です。

# 実習指導授業における「うまれる・育つ・生きる<いのち>」 プロジェクトのねらいと概要

田岡由美子

## 1. はじめに

龍谷大学短期大学部こども教育学科では、2018年度4月より1年間「うまれる・育つ・生きる<いのち><sup>1)</sup>」というタイトルでプロジェクトを立ち上げ、保育者を目指す学生が、人間の<いのち>について考える契機となる様々な活動に参加することを通して、あらゆる<いのち>を大切に生きていく姿勢を備えた豊かな人間性を涵養する保育者養成プログラムの開発を試みた。具体的には、水曜日に開講している各種実習に関する知識・技能・態度の学修や、各種実習に向けての準備等を行う実習指導授業の中で、<いのち>に焦点化した様々な内容の授業をプログラムに取り入れ、実施した。

実習指導に関する授業科目名と配当時間は以下である。また表1に、2018年度の実習指導授業スケジュールを示す。

- 水曜日（前期）1講目、1年生対象・・・保育実習指導Ⅰ（子どもの世界へ誘い）
- 水曜日（後期）1講目 1年生対象・・・保育実習指導Ⅱ（保育・教育実習の学修）
- 水曜日（前期）2講目 2年生対象・・・保育実習指導Ⅲ（施設実習の学修）
- 水曜日（後期）2講目 2年生対象・・・保育・教職実践演習（幼稚園）（振り返り）
- 水曜日（前期）3講目 2年生対象・・・教育実習（幼稚園実習の学修）

## 2. 「うまれる・育つ・生きる<いのち>」のねらい

なぜ、このような「うまれる・育つ・生きる<いのち>」プロジェクトを立ち上げたのか。以下に本プロジェクトのねらいを述べる。

近年、乳幼児の健やかな心身の育ちを支える保育者の資質向上の重要性が指摘されている。では保育者として養成すべき資質とは何か。保育所保育指針には、保育所職員に求められる専門性として、「子どもの最善の利益を考慮し、人権に配慮した保育を行うためには、職員一人一人の倫理観、人間性並びに保育所職員としての職務及び責任の理解と自覚が基盤となる」と記されている<sup>2)</sup>。他方、文部科学省は、いつの時代にも求められる教員の資質能力を、「教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力といった能力」と示している<sup>3)</sup>。いずれも、保育に関する知識・技術の獲得はもちろんのこと、高い倫理性、社会的責任の自覚、教育的愛情など、人間的資質が求められている。

さらに、特筆すべき点は、今後特に求められる資質能力として、「地球や人類の在り方を自ら考えるとともに、培った幅広い視野を教育活動に積極的に生かすこと」、「社会的に高い人格・識見を求められる」が挙げられていることである<sup>4)</sup>。地球的規模で人間について考え、人間同士や自然や人間とのつながりを感じ、同時につながりの一員で

あることを自覚して生きようとする人間像が示されている。このような人間観や倫理観は、浄土真宗に根ざした本学の学生に保証する基本的な資質「仏教、ことに浄土真宗に根ざす建学の精神に基づいた豊かな人間性」と重なる。しかもそれは、現場の保育者に求められるのみならず、保育者養成校の教育課程においても、学生に育成すべき力として求められている<sup>5)</sup>。

もちろん、保育者としての知識・技能の育成は重要なことである。しかし、地球的規模の視野に立った人間性の涵養は、本学のような宗教的教學基盤を持つ保育者養成校の根幹と重なる部分であり、生きとし生けるものすべての<いのち>を大切に生きていくという本学の教えこそ、保育者の人格の基盤となるものと考えられる。そこで、様々な実習指導授業に工夫を凝らして展開することを通して、宗教的情操を基盤とした豊かな人間性の育成を目指すことが、本プロジェクトのねらいのひとつである。

ところで、保育に携わる者にとって<いのち>は最も大事なキーワードである。人間は平等にただ一つのいのちを与えられて、生まれてくる。それをどのように充実したものにするのか、その人にしかできないような輝きを生み出すのか、その営みを支えるのが保育であり、教育であるからだ。保育者が子どもたちと楽しくゲームをしたり、製作をしたり、手遊びをしたり、歌を歌ったりするその根底には、子どもたち一人ひとりの<いのち>が輝き、躍動する瞬間を創り出し、その積み重ねの中で子どもたちの<いのち>がより充実していくようにという保育者の願いがある。そのため、本来、保育者養成課程のあらゆる授業は、学生に<いのち>の持つ不思議さ、力強さ、はかなさ、さらには、<いのち>の充実に寄りそうことの喜びや楽しさ、切なさやしんどさを感じ取ってもらいたいと願って日々行われているはずである。2年間のあらゆる授業が、そこを出発点として、つねに還っていく源泉であるといっても過言ではない。歌や絵本の読み聞かせの保育技術の修得にとどまらず、そういうことを感じ取れる豊かな感性、身体、心情を持った保育者になってほしいという願いが根底にある。そこで、保育を一人ひとりの<いのち>をめぐる営みと捉え、<いのち>の次元から今一度保育を考える。これがもう一つのねらいである。

### 3. 2018年度の主な取り組み

次に、「うまれる・育つ・生きる<いのち>」をテーマとして、実習指導授業において、学生が<いのち>の諸相を感得することを意図した主な取り組みを紹介する。

(1) 映画「うまれる」の鑑賞 (2018/5/16/水)

アンケートと分析

(2) 助産師 内田美智子先生の講演「いのちをいただいて、つないでいくこと」

(2018/6/20/水)

(3) 映画「ずっといっしょ」の鑑賞 (2018/11/7/水)

(4) 「おいでよ！ちびっこまつり～ロンロンといっしょ」(2018/7/14/土) 開催

(5) 仏教讃歌の合唱

上記の(1)～(3)の講演や映画鑑賞会は、学生に<いのち>について特別に考える機会を設けるという意味で、毎週水曜日に行われる日常的な実習指導授業に切れ目を入れた非日常、非連続のしかけと言えよう。他方、(5)の仏教讃歌は、毎回授業の最初に全員で歌うため、日常的な営み、連続的なしかけと言える。(4)の地域の子どもたちを招いた遊び祭りは、流れる日常をしばし止めて非日常的なことを行うという意味で、非連続的性格を持つものであるが、そのための準備を授業時間の内と外で積み重ねてきた点では、日常を積み重ねた結果のハイライトともいうべき場面と言える。このように実習授業の中に、非連続、連続の場面をしかけ、学生に<いのち>について考える機会を設けた。

さらには、日々の連続した授業の中で行われた指導案作成、模擬授業、実技指導、マナーやお礼状の書き方指導、実習に向けての名札づくり、施設に暮らす子どもと大人の生活の学修など多岐にわたる内容の多様なスタイルの授業を展開した。

この背景には、本学科の実習指導授業が、実習の巡回担当教員全員(2018年度は14名)、加えて実習に関する実務・調整を行う実習指導室の職員2名、さらには学生の学修のために、絵本・おもちゃや教材・教具を設置している「こども教育多目的室」の職員1名を含めた教職員全員参加によって行われているという特徴が挙げられる。実習にかかわる教職員の全員参加によって、<いのち>への多方面からのアプローチが可能となり、学生、教職員一人ひとりに<いのち>について深く考える契機を与えることとなった。

このあとに続く各教員による執筆は、「育ち一育てられる<いのち>」に焦点化して、保育者養成校における建学の精神に根ざした保育者の人間的資質向上を目指した実習指導授業の紹介とその報告であり、参加した教職員全員が走りながら考え、考えながら走った試行錯誤の1年間の軌跡である。

## 注

- 1) ここでいう<いのち>とは、生物としての人間の生はもちろんのこと、生まれ落ちた社会やそれが育んだ文化の中を生きる生や、この世にたった一人の代替不能な「私」ならではの生といったように、重層的に生きる人間の生全体を意味して<いのち>と表記している。
- 2) 保育所保育指針、平成29年度告示。
- 3) 教育職員養成審議会、平成11年第3次答申。
- 4) 同上。
- 5) ベネッセ総合教育研究所「第2回幼児教育・保育についての基本調査」第5章、2012年。[https://berd.benesse.jp/up\\_images/textarea/10\\_3.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/10_3.pdf)

表1. 2018年度「保育実習指導」授業のスケジュール(次頁及び次々頁)

2018年度 幼児教育科 水曜日授業スケジュール(前期) — 生まれる・育つ・生きるくいのち>

| 日程                 | 1講座 21号館 603(1年生 座席指定)                               | 備考                                   | 2講座 21号館 603(2年生 座席指定)                     | 備考  | 3講座 21号館 603(2年生 座席指定)                                       | 備考   |
|--------------------|--|--------------------------------------|--|---|--|--|
| 4月11日              | 1. 「保育実習指導Ⅰ」授業オリエンテーション<br>(注意事項・クラス紹介合わせ)           | 実習配課のための調査用紙<br>除却・廃棄のフローチャート&提出用紙配布 | 3. 「保育実習指導Ⅲ」授業オリエンテーション<br>(注意事項・クラス紹介合わせ) | 授業1の回は、9月19日(休<br>習振り)返り実施済み                      | 1. 「保育実習」授業オリエンテーション<br>生と死を考える授業の概要説明・課題用紙を全員に配布            | 履修カルテ回収(→3/19)   |
| 4月18日              | 2. こどもの世界へのアプローチ(1) 重心に帰る                            | 柔道場                                  | 4. 保育実習施設の研究(1)<br>母子生活支援施設                |   | 2. 指導案の考え方・書き方   |  |
| 4月25日              | 3. こどもの世界へのアプローチ(2) 仲間と協力する<br>& 2講座目に次学基礎カレポト解説会に参加 | 柔道場                                  | 5. 保育実習施設の研究(2)<br>知的障害児・者施設               |   | 3. 幼稚園教諭として働く<br>(夢窓幼稚園・升光園長先生のお話)                           |  |
| 5月2日               | 4. こどもの世界へのアプローチ(3) 子どもの目線                           |                                      | 6. 保育実習施設の研究(3)<br>知的障害児・者施設               |   | 4. 保育実践・実技指導(1) 歌とゲームの指導                                     | レク室と柔道場  |
| 5月9日               | 5. こどもの世界へのアプローチ(4)<br>声なき声に気づく / 保護者の目線             |                                      | 7. キャリアガイダンス<br>(保育業界における就職活動のマナーとルール)     |   | 5. 保育実践・実技指導(2) 歌とゲームの指導                                     | レク室と柔道場  |
| 5月16日              | 6. 休講<br>↓<br>2講座目に2年生と合同で映画「うまれる」を鑑賞                |                                      | 8. 映画「うまれる」の鑑賞会                            | 和順館B-201<br>1. 2年生合同<br>2. 実習ハンドブック配布<br>(実習等注意！) | 6. 「いのちのプロジェクト」全員でのグループワーク(1)<br>課題用紙をもとに話し合い、発表形式・内容を決定し、提出 | 部屋の確保(レク室・図工室・<br>多目的室・603・707等)                               |
| 5月23日              | 7. 図書館・キャリアセンターの紹介                                   |                                      | 9. 第1回保育実習Ⅰ(施設)オリエンテーション                   | ①実習先確認<br>②実習ハンドブック配布                             | 7. 「いのちのプロジェクト」全員でのグループワーク(2)<br>各グループでの準備                   | 部屋の確保(レク室・図工室・<br>多目的室・603・ピアノ室)<br>■実習打ち合わせ<br>次回O1予告(実習等注意！) |
| 5月30日              | 8. 観察プログラム(1) 観察・記録入門                                |                                      | 10. 第1回保育実習Ⅱ・Ⅲオリエンテーション                    | ①実習先確認<br>②保育実習Ⅰ(保育所)の評価<br>票FB                   | 8. 第1回保育実習オリエンテーション<br>残りの時間を全員でのグループワーク(3)                  | ①実習先確認<br>②保育実習(春期)の評価票中                                       |
| 6月6日               | 9. 観察プログラム(2) 学内観察実習と記録の作成                           |                                      | 11. 保育実習・教育実習の個人製作指導                       |   | 9. 保育実践・実技指導(3) 3歳児の保育                                       |  |
| 6月13日              | 10. 観察プログラム(3) 学内観察実習と記録の作成                          |                                      | 12. 保育実習施設の研究(4)<br>残りの時間を個人検査の説明          | 個人票(コピー)評価票提出<br>2. 実習検査票等配布                      | 10. 保育実践・実技指導(4) 4、5歳児の保育                                    |  |
| 6月20日              | 11. 休講<br>↓<br>3講座目に2年生と合同で内田美智子先生の講演に参加             |                                      | 13. 保育実習施設の研究(5)<br>記録・考察の書き方              |   | 11. 内田美智子先生ご講演 生と死を考える授業                                     | 和順館B-201<br>1. 2年生合同   |
| 6月27日              | 12. 観察プログラム(4) 学内観察実習報告会1                            |                                      | 休講(発表会に向けて自修)                              |   | 12. 「生まれる・育つ・生きるくいのち」発表会のリハーサル(1) 指導案の作成課題                   | 2講・3講に<br>22号館104と105を予約                                       |
| 7月4日               | 13. 観察プログラム(5) 学内観察実習報告会2                            | 保育実習Ⅰ(保育所・教育実習<br>春期)希望履修説明          | 休講(発表会に向けて自修)                              |   | 13. 「生まれる・育つ・生きるくいのち」発表会のリハーサル(2) 指導案の作成課題                   | 同上   |
| 7月11日              | 14. 観察プログラム(6) 学内観察実習報告会3                            |                                      | 「教育実習」(3講)の14回目<br>保育実践・実技指導(5) 2歳児の保育     |   | 14. 2講座目を実施  |  |
| 7月18日              | 15. 卒業生によるこども教育現場報告                                  |                                      | 14. 第2回保育実習Ⅱ・Ⅲオリエンテーション<br>保育実習の注意事項確認     | 07号館<br>(実習等注意！)                                  | 15. 後期に実施  |  |
| 7月7日(土)・<br>14日(土) |  |                                      | 15. 第2回保育実習Ⅰ(施設)オリエンテーション<br>[期間外実習生対象]    | 再オリエンテーション<br>7月25日(休)2講                          |  |  |
| 7月7日(土)・<br>14日(土) |  |                                      | 15. 第2回保育実習Ⅰ(施設)オリエンテーション                  | 再オリエンテーション<br>8月23日(休)2講                          |  |  |
| 夏休み                |  |                                      | 2年生は「ちびっこまつり」開催                            |   |  |  |

2018年度 ども教育学科 水曜日授業スケジュール(後期) — 生まれる・育つ・生きるくいのち>

| 日程        | 保育実習指導Ⅱ(1年生 座席指定)<br>1講時 21号館603(1年次後期)                                     | 備考  | 保育・教職実践演習(幼稚園)(2年生 座席指定)<br>2講時 21号館 603(2年次後期)   | 備考  | 補講ほか(2年生)<br>3講時                           | 備考   |
|-----------|---|---|---|---|--|--|
| 9月19日     | 1. 「保育実習指導Ⅱ」授業オリエンテーション<br>はじめての保育・教育実習にむけて                                 | 履修カルテ字指定・配布→9/28ウ<br>ラス担当教員に提出<br>9/28(10/30)予告(教室)<br>テキストダウンロード配布 |   |   | <1年生対象10/10の補講><br>2. キャリア(就職・進路)ガイダンス(羽溪) | 21-603   |
| 9月26日     | ★2年生の教育実習にもなう休講(10/10、10/17)の補講<br>日に指定されている。9/29(土)3講時と11/17(土)1講時<br>は無し。 |   | 1. 「保育・教職実践演習(幼稚園)」<br>授業オリエンテーション・仏語を取<br>2. 保育実習Ⅱ・Ⅲ、保育実習Ⅰ(施設)を終えて<br>実習振り返り(1)<br>3. 保育実習Ⅱ・Ⅲ、保育実習Ⅰ(施設)を終えて<br>実習振り返り(2)<br>休講(教育実習(10/9-10/19)のため)<br>→10/11:12/6(水)3講時に補講<br>休講(教育実習(10/9-10/19)のため)<br>→10/11:12/6(水)3講時に補講 | 3講時に期間休業実習OTあり<br>履修カルテの配布(2年前期の履修<br>済み科目の記入)→9/28の2講回収<br>3講時にOTあり<br>履修カルテ回収(クラス別) | 15. 第2回教育実習オリエンテーション(田岡)<br>■幼稚園免許登録説明会    | 21-602   |
| 10月3日     | 3. 保育実技指導(1)(田中・野澤)   | ★教室注意(柔道場とレクレ<br>ーション室)<br>履修カルテ回収(クラス別)                            |   |   |  |  |
| 10月10日    | 4. 保育実技指導(2)(田中・野澤)   | ★教室注意(柔道場とレクレ<br>ーション室)<br>10/24 OT予告                               |   |   |  |  |
| 10月17日    | 休講(2年生教育実習のため教員不在)<br>→9/19(水)3講時に補講  |   |   |   |  |  |
| 10月17日    | 休講(2年生教育実習のため教員不在)<br>→11/7(水)2講時に補講(1・2年生合同で映画視聴)                          |   |   |   |  |  |
| 10月24日    | 5. 第1回保育・教育実習オリエンテーション<br>(いつもどおりクラス別で着席)                                   | 実習目標・課題設定<br>個人票作成指導(一斉)  |   |   |  | 21-505・506・508<br>※固定式   |
| 10月31日    | 6. 個人票作成 面談指導(教室指定)   | 個人票作成指導(クラス別)<br>21-401・402・403・406                                 |   |   |  | 21-401・402・403   |
| 11月7日     | 休講<br>→12/15(土)3講時(2年生の実習報告会)に補講  |   |   |   |  | 3-301<br>7. 実習振り返り(5)グループ別で実習報告準備<br>■保育士登録説明会                         |
| 11月14日    | 8. 実習生のマナー(土井と<br>お礼状の書き方(齊藤・野口)  | 11/21の01予告(教室)  |   |   |  | 21-401・402・403   |
| 11月21日    | 9. 第2回保育・教育実習オリエンテーション<br>(★教室注意、配属園ごとに着席)<br>実習オリエンテーションのアポイントの取り方         | 配属確認・書類配付(評価票な<br>ど)・班長決め<br>22-B101・B102                           |   |   |  |  |
| 11月28日    | 10. 実習記録の書き方(1)(田岡)   | 個人票コピー・評価票提出  |   |   |  |  |
| 12月5日     | 11. 実習記録の書き方(2)(田岡)   |   |   |   |  |  |
| 12月12日    | 12. 第3回保育・教育実習オリエンテーション<br>(いつもどおりクラス別で着席)<br>キャリアサポート(先輩の就活体験談)            | 実習ファイル等配布<br>保護者様説明・キッド配布<br>12/15(土)3講時補講の予告<br>1/9の履修・教室・柔道場)     |   |   |  |  |
| 12月15日(土) |   |   |   |   |  | (卒業生を迎えて1・2年生合同授業)<br>13. 2年生の実習報告会に参加(1年生)<br>13. 実習報告会(4)3クラス発表(2年生) |
| 冬休み       |   |   |   |   |  |  |
| 1月9日      | 14. 卒業生による保育実技指導(羽溪)  | 柔道場   |   |   |  |  |
| 1月16日     | 15. 保育・教育実習 直前指導<br>食・体調管理の話とストレスマネジメント<br>(内田・赤澤)                          |   |   |   |  |  |
| 春休み       | 教育実習(春期)(1/30-2/12)<br>保育実習Ⅰ(保育所)(2/19-3/1)                                 |   |   |   |  |  |
| 3月18日(月)  | 実習事後指導(教室確認・3・4講時)<br>(午前中は新2年生履修説明会)                                       | 保育実習Ⅰ(施設)・保育実習Ⅱ/Ⅲ配属<br>履修カルテ配布(2018年度初期履修で<br>回収)                   |   |   |  |  |

## 保育者養成教育における仏教讃歌の実践

羽溪 了

### 1. 何故仏教讃歌なのか？

#### (1) その問題点と課題

2018年度の水曜日実習指導教育の取り組みにおいて、講義前に全員で仏教讃歌を歌うことが提案された。その理由として次の三点上げられていた。一つは、講義前に歌を歌うことによる高揚感が、講義への集中を高める。二つは、実習園で仏教園があることから、仏教讃歌に慣れておくと良い。三つは、数ある保育者養成校にあつて、龍谷大学として特色ある保育者養成のあり方として、本学の教学理念（「浄土真宗の精神」）を、仏教讃歌を歌うことで具現化する。

筆者自身は、長年仏教讃歌に親しみ、「浄土真宗」の教えを自身の鏡として歩みたいと考えてきた者ではあるが、提案当初は、様々な疑念や不安等を抱き、提案に対しては否定的でもあり慎重に考える立場であった。その理由としては、大学の教学理念であることを理由に、講義の中で仏教讃歌の歌唱を受講者に求めることの是非、一体感・高揚感の為に仏教讃歌を利用することの是非、仏教讃歌という得体の知れぬものを歌うことを求められる学生側の思い等を考えると、そう簡単に実施出来るものではないと考えた。

講義の始めに受講者全員で歌を歌うことについては、保育者養成という視点で考えると、声を揃えて歌うことを楽しむ、歌を歌うことによりその場の環境を整える、音やリズムが本質的に人と人をつなぐ機能をもつことを体感するなど、大切な要素があると考えられた。

では、その歌う歌が何故仏教讃歌であるのか？この問題が本質的であるわけだが、仏教園に実習園或いは就職園が仏教園である可能性があるからという提案理由は、本取り組みの理由にはならないと考えた。第一に、全ての学生が仏教園に実習或いは就職するものではない。むしろそのような学生は全体としては少ない。その様に、ごく一部の為になされるのであれば、キリスト教園向けに賛美歌も歌うべきであろうし、逆に全ての園を対象に定められる保育所保育指針や幼稚園教育要領の保育内容「環境」で示される「国歌に親しむ」ために、「君が代」を歌うところではあるが、そこを退け、何故敢えて仏教讃歌を歌うのか？その意味するところを、受講生である学生達に如何に説明し伝えるかを、明確にしておく必要性が生じるわけである。

#### (2) 本学の目指す保育者像

様々な保育者養成校のある中で、本学は、如何なる保育者を養成するのか？資格としては同じ保育者であっても、その資質として如何なるものを養成目的とするのか？正に本学の学び、教学のあり方が問われる、極めて本質的な問題が内包されると考える。一般的な保育者養成での学びは、様々な知識や経験を有した、賢く有能な保育者になることを目的とするであろう。一方、「浄土真宗」を教学理念とする本学の学びとは、学んだ知識や経験も、そ

の時々の自らの都合によってねじ曲げられる、決して末通らない、また学んだ知識や経験に固執し、眼前に起こるリアルな現実に対して、臨機応変に向きあおうとしない、どこまでも、自己中心的な愚かな私であると気付くことであろう。この学びから、自らの学びや経験が、決して絶対普遍のものではないとの謙虚さが伴うものであろうし、そこから常に学び続ける姿勢が確立されると考える。そのような学びを教学の礎とする保育者養成であるならば、賢く有能な保育者ではなく、自らがどこまでも愚かで無能であることに気付く保育者を養成することが、本学の目標とするところであると考えられる。その学びの延長に、常にこどもに学び、謙虚に自らを振り返り、一生学び続ける保育者があり、本学が理想とする保育者像と考える。

その様な生涯を通しての学びの姿を支え続けるものこそ、本学の教学理念「浄土真宗」であり、その教えに生きた親鸞聖人の姿であると考えられる。

## 2. 仏教讃歌の実践

前述の目的の下、先ずその情操を日頃から培う実践として、こども教育学科の全学生・教員が集う講義（保育・教育実習事前指導等）で、表現（音楽）領域の田中知子先生の歌唱指導のもと、以下の仏教讃歌を歌う取り組みを試みた。

①真宗宗歌

②恩徳讃

③仏さま

④見ていてね

⑤おねんじゅおててに

①②については、「浄土真宗」の教えそのものを表す代表的な曲である。共に、先に述べた、どこまでも愚かで、常に深い内省と学びを続けなければならないこの私を、あたたかく見守り、応援して下さる働き＝アミダ仏と教える「浄土真宗」であることから、その温もりを感じながら、「精一杯歩ませていただきますしょう」と、これら曲を歌うこととなった。

③④⑤については、本願寺派の保育現場でよく歌われてるもの一部である。内容的には、今日的な社会背景や多様な価値観のあるなかで、如何なものか？と思う歌詞もいくつか伺えるが、こどもの情操を育てる、こどもにとどまらず、そのこどもから学び続ける我々も、歌われるこどもの心情に学ぶという視点から、これらの曲を歌うこととなった。

## 3. 歌唱実践に先駆けて

歌唱指導以前に、それらの歌詞には、仏教特有の普段あまり馴染みのない文言が多い。歌唱指導では、歌詞の意味も理解して歌うことが必要であるとの見地から、事前にそれらの言葉への若干の解説を要するとのことで、その要請を受けた。筆者からは、本実践の意味を踏まえた上で、歌う曲ごとに、以下の馴染みのないことばとその簡単な説明を、又、曲によって大事にしたいところを述べたものを紹介しておく。

- ①・みのり＝法。仏法の略。釈尊が発見された、私を取り巻く「自然」（じねん）、私のいのちに働きかける「自然」（じねん）、それらの法則や姿を説かれたのが「仏教」である。その教えそのものを「法」（みのり）と言う。
  - ・まことのみむね＝まことのみ旨、まことの教えの肝心要の本旨。「アミダ仏のおこころ」を指す。
  - ・六字の御名＝「南無阿弥陀仏」の六文字。アミダ仏は自ら声の音の仏となり、いつでもどこでも誰でも、私の口を開いて「ナモアミダブツ」と音となり出してください、その音を耳にする私が、自身のいのちにかけてくれた願いと働きと出あうことが出来る。
  - ・なりわい＝生業、仕事
  - ・みおや＝み親、アミダ仏のこと
  - ・はらから＝同朋、友、仲間
- ②・如来大悲＝アミダ仏（如来）のこの私へと向けられる大きなお心
  - ・師主知識＝この私へと教えを伝え教えてくださった方々
- ③・ののさま＝「仏さま」と同義である「如来さま」が「にょにょさま」→「ののさま」と幼児語に変化して表現されてきたものと言われる。
  - ・みあかし＝御明。ロウソクの灯のこと（私の無知の心を照らす、仏さまの働きを意味する）
  - ・ごこう＝後光。仏の頭の後ろに表される光のこと

今日的に、父や母のイメージを固定的に表現することが如何なものか？との思いもあるが、ここで大事なところは、アミダ仏の働きには二つの側面がることを歌われており、その情感を味わうところにこの歌の真意があると考えられる。すなわち優しさと厳しさの二つの働きが一体となって、この私を育ててくださっているとういうことである。

宗教的表現ではないが、「力なき愛は無力であり、愛なき力は暴力」という言葉が意味するように、この全く相反する二つの働きが、手を替え品を替えて、私に働きかけてくださるのがアミダ如来（仏）のことである。こういう優しく強い働きの仏さまに、「いつでもどこでも見守られている」との心情は、こどもにとって、大きな安心感につながり、そういう環境を大切にすることを目的として大事にされる歌である。

- ④・おなまえとなえておがみます＝お名前とは、先の真宗宗歌で紹介した「六字のみ名」、すなわち「南無阿弥陀仏」（ナモアミダブツ）を、口にしてお参りします、という意味。

この歌で大切にしたいところは「見ていてね」という、こどもの心である。こどもは、声をかけてもらう以上に、自分のことを見ていて欲しい存在である。大好きな人に見守られる中で、精一杯頑張れる、そういうこどもの姿を、この歌を通して学ばせていただきたいところである。

この私を応援し続けてくださるアミダ仏とその働きを、自らの生涯を通して示し教えてくださったのが親鸞聖人である。その聖人を、親しみをもって、身近な方として紹介されるのも、浄土真宗という宗派の大きな特徴でもある。こども達にとっても、素敵なお方として紹介されている前提があればこそ、先生やご両親だけではなく、「親鸞さま見ていてね」という心情を歌っていると思われる。

⑤「お行儀が良くて良い子だね」という表現にある「良い子」があると、当然その反対に「悪い子」の存在がクローズアップされる。そういう意味で、仏教的、特に浄土真宗の教えからは如何なものか？との思いもあるが、ここは「お念珠」というものに焦点を合わせたいと考える。

お念珠は、仏教を拠り所として生きる者、全てが使用する最も大事にされる道具である。美しいお念珠の玉の一つひとつは、かけがえのない一つある。しかしそれだけでは、ただの玉で、みんなバラバラになってしまう。しかし同時に、一本のひもに繋がれてみると、お念珠としての役割も果たしている。そうした相矛盾したものが、お互いに支えあっている尊い姿がそこにある。

「成熟とは、自分がおおぜいの中の一（ワン・オブ・ゼム）であり、同時にかかけがえのない唯一の自己（ユニーク・アイ）であるという矛盾の上に安心して乗っかっておられることである」（『看護のための精神医学』中井久夫）ということばがある。

こども達へこのような話をするわけではないが、私たちがその意味を味わうときに、とても大事なことを教え続けるものが、お念珠にはある、それを子どもたちと一緒に手にかけてお参りすることの意味とは何であろうと、大きな内省へと誘ってくれるのではないだろうか？

#### 4. まとめ

以上の経過や取り組みの中で、1・2回生の水曜講義は進められた。それぞれのアンケートにおける自由記述の中では、開始当初と一年継続されての思いの変化、「戸惑い」「??」→「楽しい」「安らぎ」との好意的意見が多数をしめていた。

その様な中で、2回生の記述の中で、「実習園が仏教園であったので良かった」逆に「自身も実習園も就職園も仏教とは無縁であるのに、何故このようなことをするのか分からない」と受け取りは異なるものの、本質としては、功利的側面での役立つ、役立たないとの実践感想を持った学生が少なからずいた。このことは、本取り組みの一番肝要とするところが、十分に浸透、理解されぬままであったことを意味するところである。

一年間だけの実践で、その真意を十分伝えきれなかった旧2回生に対して、次年度以降、継続して本取り組み経験していく新2回生が、どのように理解を深めていくのかを期待すると同時に、より丁寧に繰り返し、本学での保育者養成教育において仏教讃歌を歌唱することの意味を、教員自らの問題としながら、様々な場面で深めていけるよう試んでいきたい。

## 実習指導授業において取り組んだ仏教讃歌合唱に対する学生の意識

田中知子

### I, はじめに

本学短期大学部こども教育学科においては、浄土真宗に根ざす建学の精神に基づき、他者への感謝を忘れることなく、自らを謙虚に振り返り、こどもとの関わりを通して一生学び続ける保育者の養成に重点を置いている。今年度の実習指導授業においては、本学科のこのような基本理念を基盤とし、「うまれる・育つ・生きる<いのち>」をテーマに、様々な角度から<いのち>の大切さについて考える試みが行われた。そうした中、筆者においてはテーマに添った試みを音楽の側面から取り組みたいと考え、仏教讃歌合唱を行うこととした。

実習指導授業において仏教讃歌合唱を行うねらいは、以下の4つである。

- ① 建学の精神における報恩感謝の精神に触れ、その情操を培う。
- ② 立って姿勢を正し歌うことによって、心が一つになる一体感を味わう
- ③ 歌うことで心を落ち着かせ、授業を受講するかまえをつくる。
- ④ 仏教系の実習園でよく歌われているこどもの仏教讃歌に親しむ。

仏教讃歌を歌う活動を通して、これら4つのねらいが学生の中に浸透し根づいていくことは、豊かな人間性を育むと共に、保育者として必要な資質・能力を育成する上でも有効ではないかと考え実践に繋げた。

本報告書では、学生と仏教讃歌におけるこれまでの関わりや、仏教讃歌を歌った学生の意識の変化について概観することを目的とする。

### II, 実践の背景

#### 1. 学生と仏教讃歌におけるこれまでの関わり

真宗宗歌、恩徳讃などの仏教讃歌は、入学式・卒業式をはじめとする式典行事で歌われるが、授業において学生がこれらの曲に親しみ、歌う練習をする機会のごく僅かであった。そのため、学生が仏教讃歌を身近な存在として捉えていたとは言いがたい。こどもの仏教讃歌については、仏教系の実習園に配属された学生のみ歌う機会を得るが、例えば2018年度では、実習園147園中36園(約25%)が仏教系の園であった。

また、2年次の音楽系選択授業「基礎技能Ⅱ(音楽)」では、できるだけ多くの学生が仏教讃歌に触れることができるよう、歌唱指導の機会を設けているが、授業の運営上1コマのみの実践に留まっている。こうした状況を鑑み、全ての学生に対し、仏教讃歌に触れる十分な機会を確保するためには、日ごろから歌唱でき

る場面の設定が急務であった。

## 2. 音楽系授業における仏教讃歌の取り扱い

基礎技能Ⅱ（音楽）では、先述した仏教讃歌の歌唱指導の他に、仏教系の園に実習配属となった学生への支援として、こどもの仏教讃歌の弾き歌いができるよう個人指導を行っている。授業における学生達との会話において、初めて譜読みする曲の練習方法について聞き取ると、個人差はあるものの、楽譜を丁寧に読み込まず予めユーチューブで曲を視聴し、耳に覚えさせてから弾くという傾向があった。どのようなジャンルの曲も大抵はユーチューブにアップされているため、今まで知らなかった曲でもその曲のフレームや雰囲気をつかむことは可能である。しかしながら、こどもの仏教讃歌においてはそれができる環境にないため、学生は、実習園から事前準備のためにいただいた数曲の読譜に苦戦することとなる。こうした状況の下、授業ではどうしてもピアノ伴奏の技術的な教授に時間を費やしがちとなり、歌の内容を踏まえた指導には至らないのが現状である。丸山（2013）は、保育の現場でこどもの仏教讃歌を指導する場合、「園児に対して保育者自身が仏教讃歌に対して肯定的な意識を持っていることが指導上も良い影響を及ぼすことが期待できる」（p.39）と述べている。このことから、学生が仏教讃歌を歌ったりピアノ伴奏を行ったりするには、学生自身が日ごろから仏教讃歌に馴染み、身近な存在として受け止めているということが肝要である。

## Ⅲ、仏教讃歌合唱の現状

### 1. 歌唱指導の概要

1年次「保育実習指導Ⅰ」（前期）「保育実習指導Ⅱ」（後期）、2年次「保育実習指導Ⅲ」（前期）「保育・教職実践演習（幼稚園）」（後期）における、授業の冒頭15分程度を使って歌唱指導を行った。実践で取り上げたのは、「真宗宗歌」（作詞 土呂基/作曲 島崎赤太郎）、「恩徳讃」（親鸞聖人御和讃/作曲 清水脩）、「見ていてね」（作詞・作曲 佐藤晃海）、「おねんじゅおててに」（作詞 小谷蓮乗/作曲 樋口信雄）、「仏さま」（作詞 山田静/作曲 小松耕輔）の5曲である。

前期は本学の建学の精神を培うことへの関わりから、初めに「真宗宗歌」、「恩徳讃」を4月第1回目から第4回目の授業において歌った。他の3曲については5月以降、1、2年次それぞれの授業スケジュールに合わせて、歌唱指導の時間を3回設定し歌った。後期においては1年次3回、2年次4回の歌唱時間を設定した。2年次の方が時間に余裕があったため、上記の5曲に加え、「おはようのうた」（作詞 安藤徇之介/作曲 本多鉄磨）、「ねね」（作詞 三橋あきら/作曲 本多鉄磨）、「いつまでも」（作詞 三橋あきら/作曲 本多鉄磨）の指導を行った。

指導の手順としては、まず、どのような曲かを知らせるために、筆者がキーボ

ードで伴奏を行いながら歌唱した。次に、僧侶である本学科の教員より歌詞の説明を受け、学生が歌の内容理解を深めた上で歌唱指導に入った。筆者の歌唱に続き、学生が1フレーズずつ反復する形で丁寧に歌いながら、最後には曲全体を通して歌う手法をとった。楽譜通りにただ正しく歌うのではなく、歌に込められた思いを表現することができるよう、言葉を美しく発音することや、フレーズを感じて歌うことなどに留意した。

## 2. 歌唱時の学生の様子

4月当初は、姿勢を正し立って歌うこと自体に戸惑う学生も見られたが、回を重ねるごとに表情が柔らかくなり、自然な雰囲気皆と声を合わせている様子が伺えた。殆どの学生にとって、仏教讃歌を歌うことは初めての経験であったが、少しずつ声量も増し歌声に一体感がでてくるようになった。さらに、9月以降は、楽譜から目を離し心地よさそうに歌う学生の姿も見受けられるようになった。これらの様子から、学生の中に、歌うこと・表現することに向かい合う、心と身体の素地が育まれつつあると感じられた。

## IV, 学生へのアンケート調査

実習指導授業において仏教讃歌を連続的に歌った学生の感想を得るために、1、2年次生へのアンケート調査を行った。なお、今回はそのうちの1年次生135名のアンケート結果について報告する。

アンケートの設問は以下の3つである。

設問1. 仏教讃歌を1年間歌ってみた感想を、次の1～5の中から選び○をつけてください。

- ①よかった ②どちらかと言えばよかった ③どちらとも言えない  
④あまりよくなかった ⑤よくなかった

設問2. 「仏教讃歌を歌う」と初めて聞いた時の気持ちを教えてください。

設問3. 仏教讃歌を1年間通して歌ってみた感想をお書きください。

次に、それぞれの設問の結果について述べる。設問1は選択、設問2、3については自由記述での回答とした。

設問1に関する回答は、①「よかった」86名(64%)、②「どちらかと言えばよかった」34名(25%)、③「どちらとも言えない」15名(11%)で、④「あまりよくなかった」⑤「よくなかった」については、いずれも無しであった。このことから、学生が仏教讃歌を1年間歌った体験について、概ね肯定的に捉えているということが言えるだろう。

続いて設問 2、3 での学生の記述例を以下に示す。

(設問 2 に関する回答)

- ・この大学ならではのと思ったので楽しみだった。
- ・仏教讃歌についてあまり知らなかったので、知ることができるよい機会だと思った。
- ・驚いたが、大学生になってみんなで歌うということは想像していなかったので楽しみだった。
- ・幼児が歌うようなかわいい歌はあるのかな。
- ・どのような歌なのか興味を持った。
- ・戸惑った。
- ・初めて歌うし、慣れないメロディーなので歌詞が覚えられるか心配だった。
- ・難しい言葉が多く、自分に覚えられるのか不安だった。
- ・すごく、宗教的な歌かな。
- ・なんで歌わなければならないのか不思議だった。仏教の大学なので仕方がないなと感じた。
- ・抵抗感があった。
- ・洗脳されるかと思った。
- ・仏教の歌なんて知らないし、やりたくなかった。

学生の記述からは、本学ならではの活動として今まで知らなかった仏教讃歌に触れたり、皆で歌うということを前向きに捉えている者がいる一方、馴染みのない歌詞や曲調なので覚えられるのかといった不安や、宗教色が強まるのではないかという危惧、仕方がない・やりたくないといった歌うことに対する抵抗感を抱いた者など様々である。中でも、学生が歌いたくないと感じたのは、日ごろ聞きなれない仏教に関わる言葉が仏教讃歌の歌詞に用いられているために、理解しづらい・堅苦しい・おもしろくないといったイメージが先行し、興味が湧かなかつたからではないかと推察する。

(設問 3 に関する回答)

- ・朝から歌うととっても元気が出るし、歌の大切さに気づくことができた。
- ・みんな一体感が出てきているような感じがした。
- ・みんなで歌う楽しさを学んだ。
- ・仏教讃歌を歌うことは今までなかったし、週一回学年全体で歌うことができたのはよい経験だった。

- ・優しい歌詞、おちついた曲調で歌っていて気持ちがよくなった。
- ・心が落ちついた。
- ・最初はただ歌っているだけだったが、段々意味を理解しながら歌うことができた。
- ・もし仏教讃歌を歌う園で働くことになった場合、絶対に意味を伝えられるようにしたい。
- ・実習でも仏教の歌が出てくるので、歌っていてよかったなと思った。
- ・仏教讃歌を覚えられて（知ることができて）よかった。
- ・仏教的な言葉が使われている歌を歌うのは初めてで新鮮だった。
- ・なだらかなメロディーで、とても心にしみりくる歌だった。
- ・思ったより、親しみやすかった。
- ・子どもでも歌いやすいと思った。
- ・耳に残りやすかった。
- ・頭から離れなくなった。
- ・「みていてね」と「恩徳讃」が印象に残っている。
- ・やはり歌い続けると覚えられて、楽しいと思った。
- ・これから歌う時も自信を持って歌いたい。
- ・歌で仏教に関わっていく形もいいなと思った。
- ・歌っているうちに、仏教の歌をもっと歌いたいと感じた。
- ・リズムが難しくて歌いにくかった。
- ・何度聞いても歌詞はすごく怖いと感じる。

「思ったより、親しみやすかった。」「頭から離れなくなった。」「『みていてね』と『恩徳讃』が印象に残っている。」「やはり歌い続けると覚えられて、楽しいと思った。」「歌っているうちに、仏教の歌をもっと歌いたいと感じた。」という学生の記述からは、仏教讃歌に親しみ積極的に歌っている様子が伺える。特に恩徳讃は学生に好まれており、自然に口ずさむほどブームになっているという話も耳にしている。

また、学生の記述を本取り組みにおける4つのねらいに照らし合わせてみると、以下のようなことが推察される。

「最初はただ歌っているだけだったが、段々意味を理解しながら歌うことができた。」「初めは言葉の意味が分かりにくかったが、先生の解説もあって、歌詞の意味を理解して歌うことができてよかった。」は、歌詞の内容を理解した上で仏教讃歌を歌うことの重要性に気づいており、①「建学の精神における報恩感謝の精神に触れ、その情操を培う。」に繋がるものでないかと考えられる。

「みんなで歌う楽しさを学んだ。」「みんな一体感が出てきているような感じが

した。」「仏教讃歌を歌うことは今までなかったし、週一回学年全体で歌うことができたのはよい経験だった。」からは、活動を通して仲間と共に歌うことの楽しさや、一体感を得たことが伺え、②「立って姿勢を正し歌うことによって、心が一つになる一体感を味わう。」に相当すると思われる。

続いて、「心が落ちついた。」「優しい歌詞、おちついた曲調で歌っていて気持ちよくなった。」「朝から歌うととっても元気が出るし、歌の大切さに気づくことができた。」については、仏教讃歌を歌うことで気持ちを整えることができおり、③「歌うことで心を落ち着かせ、授業を受講するかまえをつくる。」に繋がっているのではないかと考えられる。

最後に、「子どもでも歌いやすいと思った。」「実習でも仏教の歌が出てくるので、歌っていてよかったなと思った。」「もし仏教讃歌を歌う園で働くことになった場合、絶対に意味を伝えられるようにしたい。」からは、こどもの仏教讃歌に親しむと共に、歌詞に込められた意味を子ども達に伝えることの意義を感じていることがわかる。これは、④「仏教系の実習園でよく歌われているこどもの仏教讃歌に親しむ。」に該当すると思われる。

以上のように仏教讃歌を1年間歌った学生の記述を概観すると、歌い始める前に感じていた不安や危惧、抵抗感は薄れ、むしろ仏教讃歌を歌うことに関心を持ち意欲的に取り組もうとする意識に変化していることがわかる。また、そうした意識の変化が、設問1の回答に示される肯定的な結果を引き出したと考えられる。

#### IV, 今後の課題

学生へのアンケート調査を通して、今回実習指導授業において連続的に仏教讃歌を歌った体験には、取り組みにおける4つのねらいが反映されていると感じられた。今後は歌詞の内容理解と共に、仏教讃歌の持つハーモニーの美しさを感じながら歌うことができるように指導し、保育者としての表現力向上にも繋げていきたい。

#### <引用文献>

今田達 (1994) 『こどもたちの讃歌 (1)』 同朋舎出版

今田達 (1994) 『こどもたちの讃歌 (2)』 同朋舎出版

浄土真宗本願寺派保育連盟教育原理委員会 (2014) 『真宗の教えとまことの保育』  
浄土真宗本願寺派保育連盟

丸山千晶 (2013) 「若年層保育者の仏教讃歌への意識向上に関する提言ー老人福祉施設訪問を契機とする女子高生の仏教讃歌に対する受容態度の変化に関する考察ー」『真宗保育学会第20回大会要旨集』 p. 39

## 映画「うまれる」の鑑賞 鑑賞前後のアンケート結果より

赤澤 正人

### 目的

生と死、命を考える教育プログラムにおいて、こども教育学科では、保育者の資質向上を目的として『うまれる・育つ・生きる<いのち>』をテーマに、<いのち>を大切に育むことを根底において保育・教育実習指導を行っている。その中で2018年度は「うまれる」に焦点を当てて、映画上映会を2回実施した。映画を通して、学生たちが各種実習で出会う子どもたちあるいは自分自身の<いのち>の誕生の重みや喜び、困難さを実感する契機とした。本稿では第1回目の映画「うまれる」の鑑賞前後のアンケート結果を基に、学生の気づきや学びを報告する。

### 概要

映画「うまれる」(企画・監督・撮影:豪田トモ、2010年制作)は、両親の不仲や虐待の経験から親になることに戸惑う夫婦、出産予定日に我が子を失った夫婦、子どもを望んだものの授からない人生を受け入れた夫婦、完治しない障害(18トリソミー)を持つ子を育てる夫婦、と命を見つめる4組の夫婦が登場し、妊娠・出産だけでなく、流産・死産、不妊、障害、「子供が親を選ぶ」という胎内記憶など『うまれる』ということ、幅広く捉える事で、出産だけではなく、親子関係やパートナーシップ、そして生きるという事を考える・感じる内容になっている(HPより)。

映画鑑賞の日時と場所、参加者については下記のとおりであった。なお映画鑑賞によって体調や気分の異変を感じた場合は、退室可能であることを事前に周知した。

日時:2018年5月16日(水)10:45~12:30

場所:龍谷大学深草キャンパス和顔館B201教室

参加者:龍谷大学短期大学部こども教育学科1回生、2回生、龍谷大学他学部の学生、教職員、一般の方々の約300名

### <アンケートの実施>

こども教育学科の学生には、映画鑑賞2週間前の授業内で事前アンケートを配布し回収した。また映画鑑賞後にアンケートへの回答を求め、1週間後に回収した。

アンケートの内容は、いのちについて考える/考えた程度、生きている実感や喜びを感じ

る程度、生きていることへの周囲への気づきの程度などについて尋ねた。

## 結果

回答者の内訳について、映画鑑賞前のアンケートでは1回生 135名 (49.1%)、2回生 131名 (47.6%)、無回答 9名 (3.3%) の計 275名から回答を得た。そして、映画鑑賞後のアンケートでは1回生 129名 (48.0%)、2回生 132名 (49.1%)、無回答 8名 (2.9%) の計 269名から回答を得た。

図 1 に、「いのち」について普段考えた／考える頻度を、図 2 に映画鑑賞後の「いのち」について考えた程度の回答割合を示す。

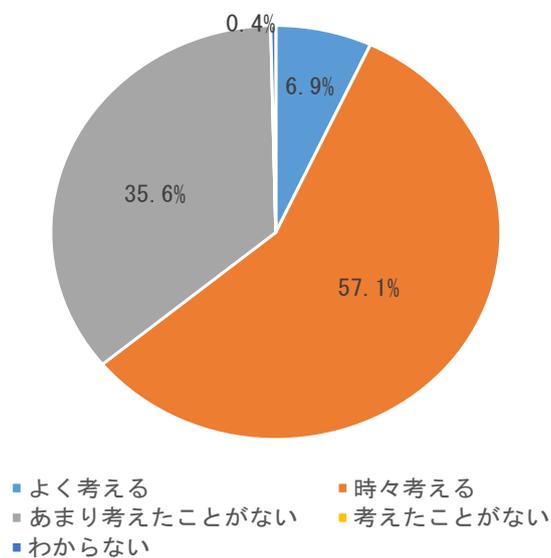


図 1 映画鑑賞前「いのち」について考えた／考える頻度の回答割合

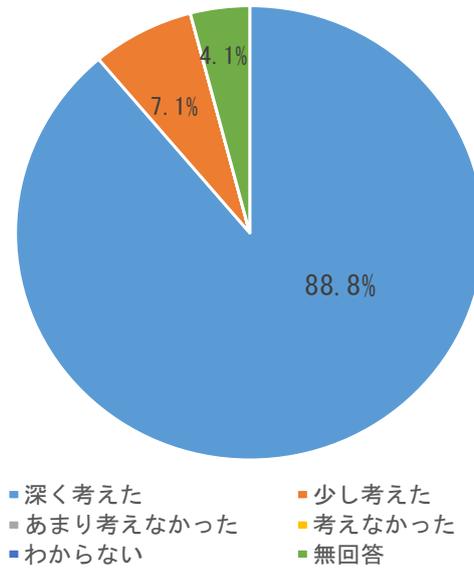


図2 映画鑑賞後、いのちについて考えた程度の回答割合

映画鑑賞前は、「いのち」について「よく考える」(6.9%)、「時々考える」(57.1%)と回答した学生は64.0%であった。一方で36.0%の学生が、「いのち」について、「あまり考えなかったことがない」(35.6%)、「わからない」(0.4%)と回答していた。そして、映画鑑賞後は、「いのち」について「深く考えた」(88.8%)、「少し考えた」(7.1%)と回答した学生は95.9%であった。

次に、図3に映画鑑賞前後での生きている実感や、喜びを感じるかどうかの回答割合を示す。

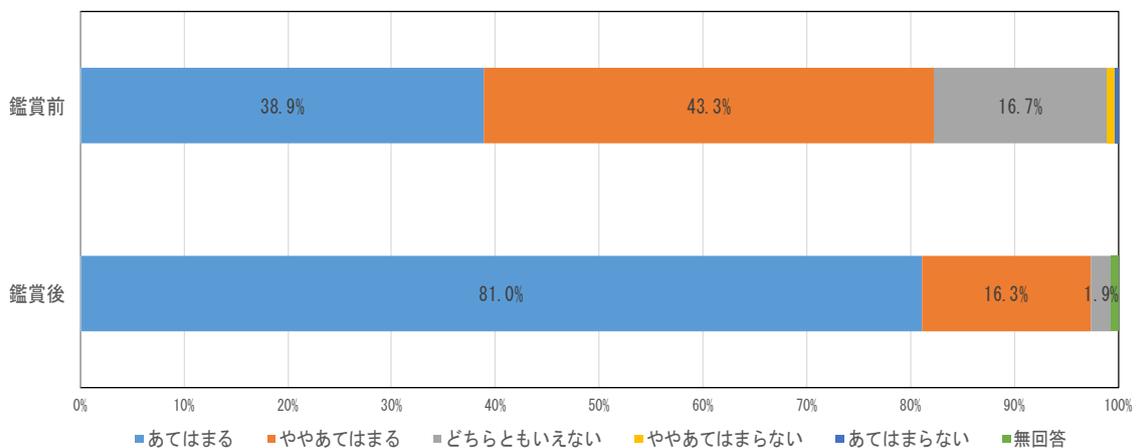


図3 映画鑑賞前後での生きている実感や、喜びを感じるかどうかの回答割合

映画鑑賞前は、生きている実感や喜びを感じるかどうかという質問に「あてはまる」(38.9%)、「ややあてはまる」(43.3%)と回答した学生は82.2%であった。映画鑑賞後は、同様の質問に「あてはまる」(81.0%)、「ややあてはまる」(16.3%)と回答した学生は97.3%であった。

続いて図4に映画鑑賞前後での、周りの人のおかげで生きていられると思うかどうかの回答割合を示す。

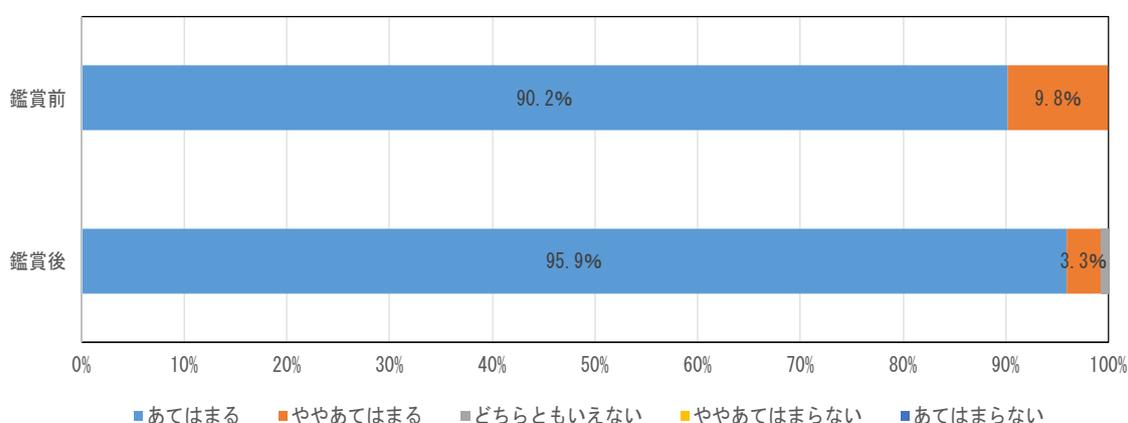


図4 映画鑑賞前後での、周りの人のおかげで生きていられると思うかどうかの回答割合

映画鑑賞前は、周りの人のおかげで生きていられると思うかどうかという質問に「あてはまる」(90.2%)、「ややあてはまる」(9.8%)と回答した学生は100%であった。映画鑑賞後は、同様の質問に「あてはまる」(95.9%)、「ややあてはまる」(3.3%)と回答した学生は99.2%であった。

### 考察

映画鑑賞前では、<いのち>について考えることのある学生は60%強であったが、映画鑑賞後には95%以上の学生が<いのち>について考えたと回答していた。このことから、映画鑑賞が<いのち>について考える大切な契機となったことが示されたと思われる。

また、生きている実感や喜びを感じるかどうかの程度についての結果を見ると、映画鑑賞前後で「あてはまる」と回答した割合が大幅に増加していた。周りの人のおかげで生きていられると思うかどうかの結果では「あてはまる」の回答割合は微増にとどまったものの、鑑

賞前から高い割合だったことを考慮すると妥当な結果と考えられる。

これらの結果から、映画「うまれる」の鑑賞によって、＜いのち＞の尊さや喜び、生かされている＜いのち＞について、自らのこととして真摯に考え、それらを実感することができたと思われる。

学生が各種実習で関わる子ども達の＜いのち＞、あるいは自分自身の＜いのち＞の重みや尊さといった頭では理解しているものを、感覚的に体験することができる映画鑑賞は、非常に意義のあることだと考えられた。

## 映画「ずっと、いっしょ」の鑑賞 鑑賞前後のアンケート結果より

赤澤 正人

### 目的

生と死、命を考える教育プログラムにおいて、こども教育学科では、保育者の資質向上を目的として『うまれる・育つ・生きる<いのち>』をテーマに、<いのち>を大切に育むことを根底において保育・教育実習指導を行っている。その中で2018年度は「うまれる」に焦点を当てて、映画上映会を2回実施した。映画を通して、学生たちが各種実習で出会う子どもたちあるいは自分自身の<いのち>の誕生の重みや喜び、困難さを実感する契機とした。本稿では第2回目の映画「ずっと、いっしょ」の鑑賞前後のアンケート結果を基に、学生の気づきや学びを報告する。

### 概要

映画「ずっといっしょ」（企画・監督・撮影：豪田トモ、2014年制作）は、最愛の妻を失った事実に向き合う夫、血の繋がりが無い息子に向き合う父、重篤な障がいをもつ子を育てる夫婦の3家族が登場し、彼らの姿を通して、常に密接にある“生と死”を凝視しながらも、そこから脈々と受け継がれていく生命、生きる力、そしてその土台となる“家族の在りよう”を考え、感じる内容となっている（同映画チラシより）。

映画鑑賞の日時と場所、参加者については下記のとおりであった。なお映画鑑賞によって体調や気分の異変を感じた場合は、退室可能であることを事前に周知した。

日時：2018年11月7日（水）10：30～12：30

場所：龍谷大学深草キャンパス3号館301教室

参加者：龍谷大学短期大学部こども教育学科1回生、2回生、龍谷大学他学部の学生、教職員、一般の方々の約300名

### <アンケートの実施>

こども教育学科の学生には、映画鑑賞1週間前の授業内で事前アンケートを配布し回収した。また映画鑑賞後にアンケートへの回答を求め、1週間後に回収した。

アンケートの内容は、家族について考える／考えた程度、家族における<いのち>のつながりを感じる程度、自分が親になった時のことを考える頻度などについて尋ねた。

## 結果

回答者の内訳について、映画鑑賞前のアンケートでは1回生119名(45.4%)、2回生127名(48.5%)、無回答16名(6.1%)の計262名から回答を得た。そして、映画鑑賞後のアンケートでは1回生106名(51.5%)、2回生99名(48.1%)、無回答1名(0.4%)の計205名から回答を得た。

図1に、「家族」について普段考えた／考える頻度を、図6に映画鑑賞後の「家族」について考えたかどうかの回答割合を示す。

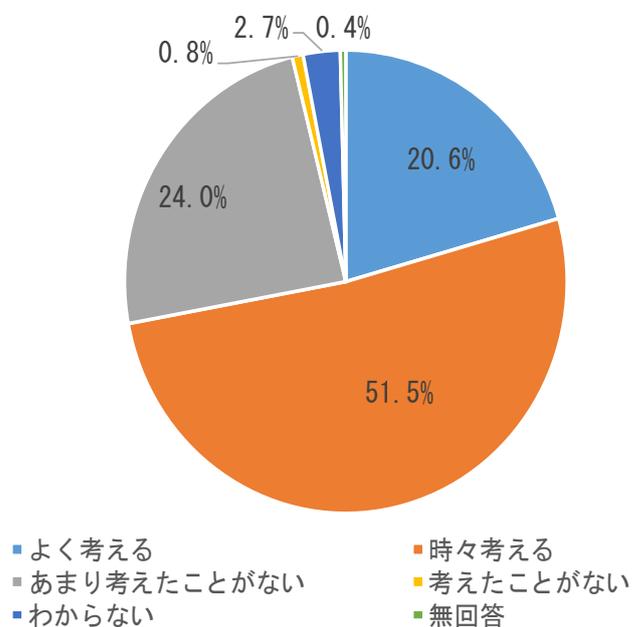


図1 映画鑑賞前の「家族」について考えた／考える頻度の回答割合

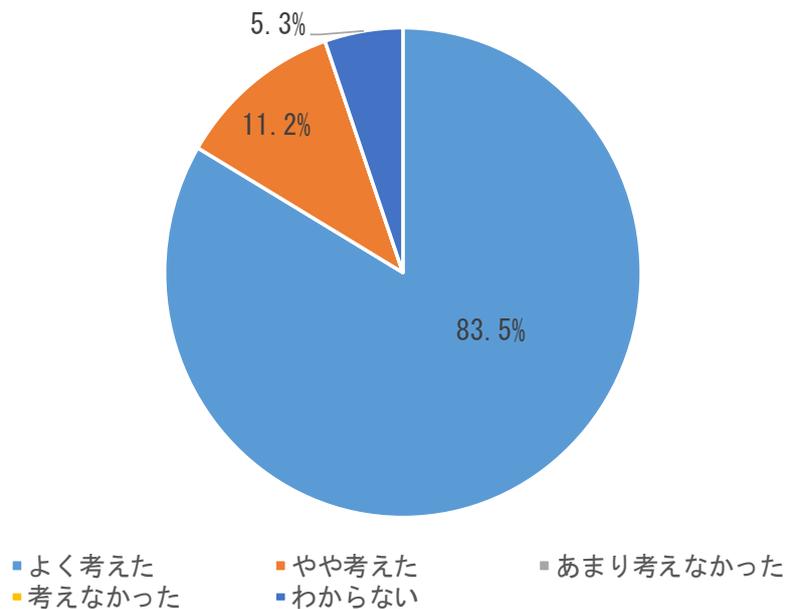


図2 映画鑑賞後「家族」について考えたかどうかの回答割合

映画鑑賞前は、家族について「よく考える」(20.6%)、「時々考える」(51.5%)と回答した学生は72.1%であった。一方で27.5%の学生が、家族について、「あまり考えたことがない」(24.0%)、「考えたことがない」(0.8%)、「わからない」(2.7%)と回答していた。そして、映画鑑賞後は、家族について「よく考えた」(83.5%)、「やや考えた」(11.2%)と回答した学生は94.7%であった。

次に、図3に映画鑑賞前の父や母とのいのちのつながりを感じた程度の割合を、図4に映画鑑賞後の家族における<いのち>のつながりを感じた程度の回答割合を示す。

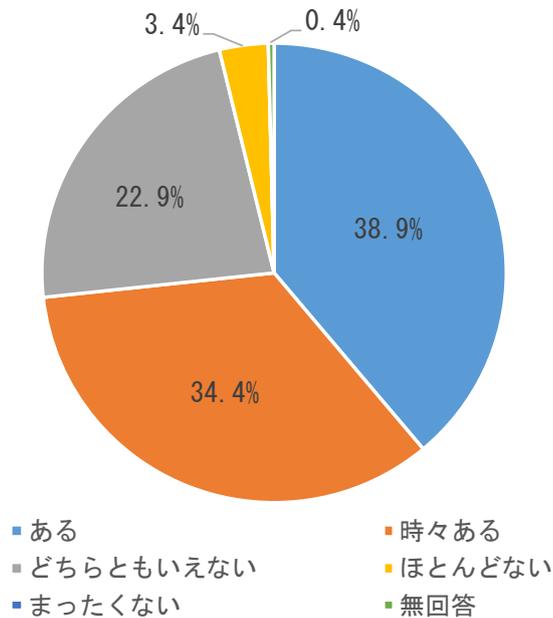


図3 映画鑑賞前の父や母とのいのちのつながりを感じる程度の回答割合

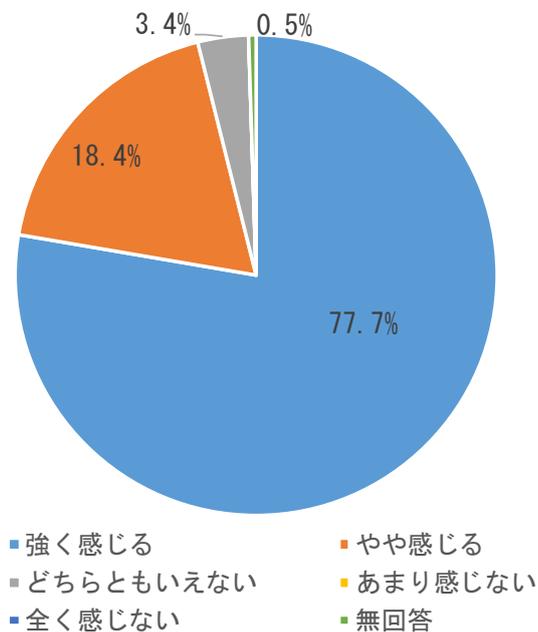


図4 映画鑑賞後の家族における<いのち>のつながりを感じた程度の回答割合

映画鑑賞前は、父や母とのいのちつながりを感じたことがあるかどうかという質問に「ある」(38.9%)、「時々ある」(34.4%)と回答した学生は73.3%であった。映画鑑賞後は、家族における<いのち>のつながりを感じたかどうかという質問に「強く感じる」(77.7%)、

「やや感じる」(18.4%)と回答した学生は95.4%であった。

続いて、図5に映画鑑賞前の自分が将来親になった時のことを考える頻度の回答割合を、図6に映画鑑賞後の自分が将来親になった時のことを考えた程度の回答割合を示す。

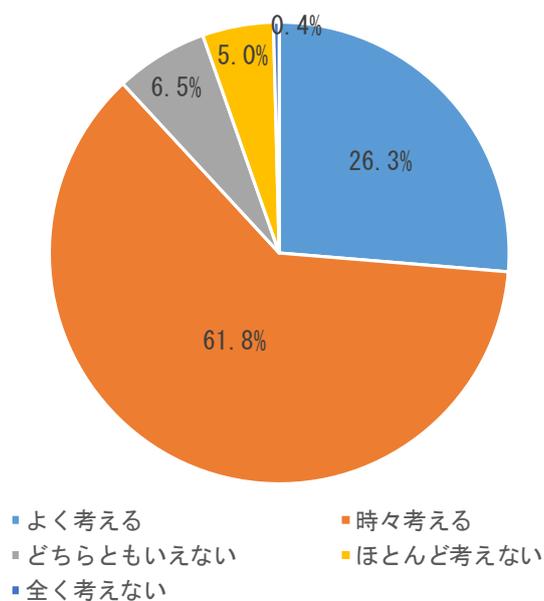


図5 映画鑑賞前の自分が将来親になった時のことを考える頻度の回答割合

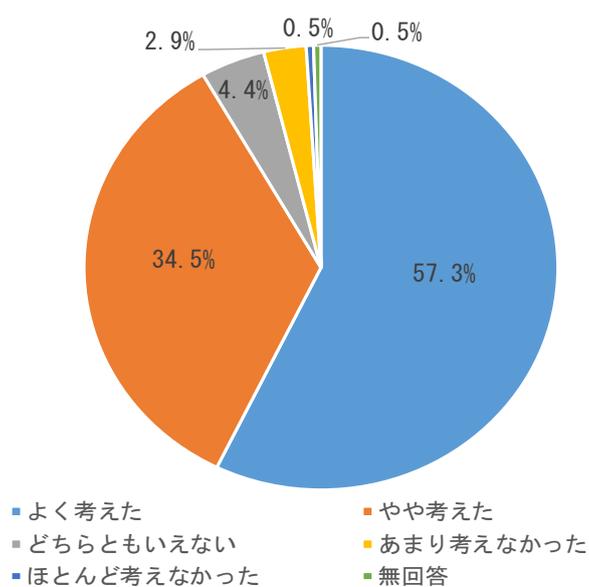


図6 映画鑑賞後の自分が将来親になった時のことを考えた程度の回答割合

映画鑑賞前は、自分が将来親になった時のことを考えることがあるかという質問に「よく考える」(26.3%)、「時々考える」(61.8%)と回答した学生は88.1%であった。映画鑑賞後同様の質問に「よく考えた」(57.3%)、「やや考えた」(34.5%)と回答した学生は91.8%であった。

#### 考察

映画鑑賞前には家族について「よく考える」と回答した学生が20.6%だったのに対して、映画鑑賞後には83.5%の学生が「よく考えた」と回答していた。映画の内容からは妥当な結果とも言えるが、映画鑑賞が家族について考える大切な契機となったことが示されたと思われる。

また、父や母とのいのちのつながり、家族におけるいのちのつながりについての結果を見ると、映画鑑賞前後でいのちのつながりを感じた学生の割合は増加していた。そして、自分が将来親になった時のことについての結果も、映画鑑賞前後で「よく考えた」回答割合は増加していた。回答の選択肢が鑑賞前後で異なるため単純比較はできない点に注意して考察すると、家族には様々な事情や形態があり、学生の家族背景も一様ではない中で、学生一人ひとりが考えるいのちのつながりや、家族のあり方も多様なものであると思われる。その上で、家族の中におけるいのちのつながり、そして自分自身を考えるきっかけとなったのかもしれない。

これらの結果から、映画「ずっと、いっしょ」の鑑賞によって、家族の存在やつながりについて、自らのこととして真摯に向き合い考えることができたと思われる。学生が今後関わることになる子ども達の背景にいる家族、あるいは自分自身の家族について、その多様性やあり方、つながりといったものを学び考えるきっかけとなる映画鑑賞は、非常に意義のあることだと考えられた。

## 内田美智子先生 講演「いのちをいただいてつないでいくこと」

野口聡子・星野繁一・内田眞理子

日時：2018年6月20日(水) 10:30 ～ 12:15

場所：龍谷大学深草キャンパス（和顔館 B201 教室）

実施主体：こども教育学科 1年生、2年生、他学部・他学科

来場者人数：学生：297名(1年生：142名、2年生：138名、他学部・他学科20名)、  
教職員20名

### 1. 経緯・目的

保育士養成課程において、建学の精神に基づき、いのちを繋ぐ「食」について、食の循環、環境への意識を高め、健やかな感性を持った保育者を育てることに力を入れている。「うまれる・育つ・生きる<いのち>」というタイトルで様々な授業や活動を企画し<いのち>について深く考える機会を持っている。その活動の一つとして、助産師内田美智子先生に「いのちをいただいてつないでいくこと」と題して、ご講演いただき、生と死の意味、いのちのつながりについての学びを深めた。

### 2. 概要

生と死、命に関する学外講師による特別講義を実施することにより、身近な問題として生と死の意味、生命の繋がりについての学びを深め、社会福祉や保育・幼児教育の基礎となる豊かな人間性と共生(ともいき)の精神を涵養し、「龍谷大学の教育にかかる基本方針」、「学部共通の教育目標」、両学科のDP等に沿った人間を育成する。また特別講義・ワークショップ等のプログラム実施後に、受講生に対して生と死の意味、生命の繋がりについての学びが深まったかどうかのアンケートを実施し、効果測定を行うとともにその結果をもとにプログラムの改善を図った。



### 3. 受講生の声 <1年生>

- ・授業では教えてくれない恋の話や性の話は、聞いて為になることばかりでした。妊娠は大変だという以上に子どもを出産した時の幸せな気持ちを味わいたいとも思った。
- ・高校生、大学生になるとバイトをし、自由になるお金が使えて好きなものしか食べなくなり、栄養が偏ってしまう事が原因だと思った。幼少期は体を作る時期なので偏った食

事ではいけないと思ったが、保育者としてどうしたらいいのか難しい。

- ・「ないわ〜」と言っておられたのがとても印象的で面白かった。パンをよく食べるので、野菜を摂って食生活に気を遣おうと思った。毎日いのちの生まれる瞬間を見ている方のお話は重みが違った。五体満足で元気に生まれた事、親に世話になり養ってもらえた事は当たり前とっていたが、とても幸せで、有難い事と気付けた。
- ・母が作ってくれるお弁当を大学へ入ったら自分で作ると決めていたが、いざ自分で作るとバランスが悪かった。“自立と自律”という言葉が印象に残った。2年後には社会に出て“先生”という立場なので、自立（自律）しないといけない。
- ・妊娠できない理由は女性だけでなく男性にもあるとわかった。男性の食生活が生まれてくる子どもに影響すると知り、食べることはとても大切とわかった。
- ・講演時に、一人暮らしの大学生の食生活の写真を見て他人事ではないなと思った。保育者の卵として成長したい。一人の女性として、大きくなりたいと思った。
- ・障がいを持った子どもを産んだお母さんが、“私は自分が悪いだなんて思わないから、あなた(子ども)も自分が障がいをもって生まれてごめんなさいなんて思わないでね”のコメントは感動し心に残った。

#### 〈2年生〉

- ・デートDVの話で自分の意見を言えることは一度もなく怖いと思うことが多かったが、反対に優しい時はすごく優しいため、自分の間違いに気づくことができた。
- ・今の日本は望まない妊娠が多く、この世に生まれない命がたくさんあるということを改めて考えた。自分の体は自分で守らないといけないという事を考える良い機会だった。
- ・母親の偉大さに気付いた。朝ごはんを食べる大切さがわかった。
- ・一番印象に残ったのは死産の子を産む人のお話だった。想像以上の辛さを感じた。一食一食の食事ですら生理など女性の体に変化があらわれる事を学んだ。
- ・思春期の頃は母と衝突することが多く、喧嘩をする度に「産んでくれんでよかったやん」と言い返したが、両親の離婚後、親の存在が何なのか考えた。衝突しすれ違っても、健康に育ててくれた変わりない尊い存在と受け止め、素直に親に感謝したい。
- ・“母親は命懸けであなたを産みました。あなたが当たり前のように生きる毎日は、奇跡の連続だと気づき、一人暮らしをする時にあなたは一人で生きていきますか。”一人暮らしを始め、両親の大切さを実感し、両親への感謝の気持ちが大きくなった。
- ・「生まれる」ことのすばらしさ、親の強さ、そしてこれから私はどのように生きていくべきか考えた。「生」の反対は「死」ではなく「生まれてこない」と印象に残った。

#### 4. まとめ

助産師内田美智子先生のお話は、生まれてきて、いのちを繋ぐということが伝わってきた講演であった。保育士養成課程において、健やかな感性を持つ保育者を育てることを目指しているが、本講演は、男女の性の問題、様々な出産の事例などから、〈いのち〉について深く考える機会となった。

## おいでよ！ちびっこまつり

野口聡子・内田眞理子

日時：2018年7月14日(土) 10:30～11:30 7月7日は台風のため中止

場所：龍谷大学深草キャンパス（22号館 104教室、105教室、106教室、303教室、304教室）

実施主体：こども教育学科 2年生

来場者人数：保育園児 50名(稲荷・砂川保育園：30名、うずら保育園 20名)、  
教職員、近隣住民、教職員家族 30名、卒業生 10名

### 1.経緯・目的

保育士養成課程において、建学の精神に基づき、いのちを繋ぐ「食」について、食の循環、環境への意識を高め、健やかな感性を持った保育者を育てることに力を入れている。「うまれる・育つ・生きるくいのち」というタイトルで様々な授業や活動を企画し、くいのちについて深く考える機会を持っている。その活動の一つとして、くおいでよ！ちびっこまつりを7月に開催し、地域住民や近隣の保育園児、教職員及びその家族の方々を招いて様々なプログラムを提供した。プログラムの内容については、本学2年生の学生が、「いのち」や「食」の大切さを子どもたちにどのように伝えるかを考え企画した。

### 2.概要

#### 1.「食」に関する取り組み

##### 1) 小児栄養演習での調理実習について

現代は親から子への「食」に関する伝承が減少し、不規則で偏った食生活となっていることが多い。保育者を目指す若者に食に関わる知識や技術を伝える機会が少なくなっているため、小児栄養演習では調理実習を通して、講義内容と関連付けて実際に調理を体験することで、より「食」を身近なものとして捉え、自身の食生活を見直すとともに「食べることの大切さ」を幼児たちに伝えることができる保育者の養成を目指している。



## 2)食育の実践について

### ①<おいでよ！ちびっこまつり>の実際

「いのち」や「食」の大切さをどのように子ども達に伝えるか、学生がグループで話し合い、様々なゲームやプログラムを作り上げた。その中の食育に関する企画を下記に示す。

- カレーライス
- おやさいポンポン
- ぐつぐつ
- すくすくのびのびなかな？バスケット
- たまごリレー
- さわってかんじてスライムどろ～ん



<カレーライス>



<おやさいポンポン>



<ぐつぐつ>



<たまごリレー>



<すくすくのびのびなかな？バスケット>



<さわってかんじてスライムどろ～ん>



#### 4. <おいでよ！ちびっこまつり>活動報告



おいでよ！ちびっこまつりの様子を学生が準備段階から発表当日までをグループ毎にまとめ報告した。その記録を、2018年10月19日から10月26日まで和顔館1F学生デント commonsにて展示し、活動を大学内にて報告した。

#### 5. 受講生の声

##### <2年生>

- ・グループで協力し合えたことで、団結力が強くなりグループの活動が楽しかった。
- ・皆で一つのものを作り上げることの難しさと共に、やり遂げた達成感と嬉しさを感じた。
- ・子どもたちが問いかけに元気よく答え楽しむ様子を体験でき、すごく嬉しかった。作り上げた誇りと自信に変え、何らかの設定保育がある時に活かしていきたいと思った。
- ・講義のみならず、このような企画から学べることがあった。
- ・来てくださった地域の方々や子どもたちが楽しんでくれたことは良かった。しかし就職活動や実習前で忙しい時期と重なり正直しんどかったので、開催時期は検討して欲しい。
- ・子どもたちが「もう一回！」と何度も来てくれて笑顔になってくれ、保護者の方も喜ぶ子どもを見て「ありがとうね」と言ってくださり、良かったと心から思えた。
- ・忙しい中、空きコマや休み時間を使い練習し、発表することができたことは良かった。

#### 6. まとめ

浄土真宗の精神に基づいた豊かな人間性、いのちの循環を考えることは、本学の建学の精神でもある。食にまつわること、いのちのサイクルを考えることに様々な教員や地域住民と連携し、このプロジェクトに取り組めた。このプロジェクトを通して、食に対する興味、関心、意欲を引き出し、感性や実践力を養う食育の学習の機会となった。

## 知的障害児・者施設での実習に向けての事前指導

武岡ゆかり

### 1. 目的

保育士資格の取得を目指す学生は、保育所保育士を志す者が大半であり、保育士養成課程の中で障害児・者施設での実習が課せられていることへの疑問があるままに実習に臨む学生も少なくないと感じている。

そこで、保育士養成課程における施設実習の意味・目的を伝えるとともに、障害の基礎知識や実習時のマナーを説明することで、実習に対する不安の軽減を図ることを目的とし、本講義を実施した。

### 2. 概要

#### 1. 導入として

##### 1) 津久井やまゆり園に関する動画「19の折り鶴」

平成28年7月26日未明、神奈川県相模原市にある知的障害者施設「津久井やまゆり園」に元職員が侵入し、入所者19名を殺害、26名を負傷させた事件についてははじめに説明した。

講義実施時には、この事件から1年以上が経過していたが、「うまれる、育つ、生きる〈いのち〉」というテーマのもとに講義を組み立てる上で、今一度相模原事件を学生とともに振り返りたいと考え、講義冒頭に事件について取り扱った「19の折り鶴」という短い動画を鑑賞した。

この動画は、静岡県にある知的障害者を対象としたグループホーム「ラルシュ・かなの家」が制作したものである。相模原事件と犯人の動機を知り衝撃を受けたグループホームの入居者が、事件の犠牲者と同じ数の19羽の折り鶴を作ることで彼らの答えを示している。動画の最後には「世界を違う角度から」という言葉が現れ、障害と共に生きる人々に対して思い込みはないかと視聴者に問いかけがされる。

##### 2) ねらい

障害者の命が軽視されて起きたこの事件について知る(思い出す)ことで、自身にどのような感情や考えが湧くのかを知る機会をつくり、誰しもが少なからず障害者に対して「思い込み」を抱いていることに気付いてもらいたいというねらいがあった。

そして、次で説明する障害者の行動や支援方法はあくまでもほんの一例にすぎず、本講義で得た知識が「思い込み」に繋がらないようにとの意図も込め、この動画を選択した。

## 2. 施設実習に向けて

### 1) 知的障害の人によく見られる行動の特徴に関する説明

障害特性は一人ひとり異なるということを大前提とし、教員自身の経験談も交えながら知的障害の人によく見られる行動の特徴の一例を紹介した。

### 2) ロールプレイによる実践

障害者支援は個別に作成された支援計画に基づいて行われるため、支援（施設での作業プログラム、援助の度合い等）には必ず目的があることを説明した。その上で、「食事」「排泄」という日常の2つの場面と対象者を設定し、その援助方法について10名程度のクラスで検討してもらい、支援場面のロールプレイを行った。

## 3. 障害者の社会参加

### 1) 真のバリアフリーとは

バリアフリーと聞いてどのようなことが浮かぶかを数人の学生に尋ねたところ、「点字ブロック」や「スロープ」といった物理的な内容が挙がった。それらはバリアフリーの一部でしかなく、バリアフリーの本来の意味は、多様な人々が社会に参加する上での障壁（バリア）をなくすことである。

そこで、講義冒頭に流した動画内にあった「あなたのなかの、はっきりとしない思い込みとはなんですか？」との問いかけを振り返り、障害者に対する「思い込み（偏見）」自体が、社会に参加する上での障壁（バリア）の1つになることを伝えた。

### 2) 障害者の人権

まとめとして、障害者の就労に向けたアメリカのサポートプログラムでしばしば利用される「リスクを負う尊厳」の文章の一部を紹介した。「もしも、あなたが〇〇だとしたら、どうですか？」といういくつかの問いを学生に投げかけることで、人としての権利に違いがあってはならないことを伝えた。

### 3. 受講者の声（コメントシートより抜粋）

- ・知的障害の方々ができるまでできて何ができないのか、人それぞれではあると思いますが、しっかり理解をして施設実習に行くことができるようにしたいです。
- ・障害をもった人への考え方は人それぞれだと思うけれど、私にとったら接し方が分からないというのが正直な気持ちです。しかし、今日のお話を聞いて福祉を学ぶことの大切さを感じました。
- ・夏にある施設の実習に向けて、少し怖いなという思いがあります。しかし、はじめに見た動画で障害者の方が頑張っている姿を見て素晴らしいなと思いました。
- ・ただ手伝うのではなく、その人の性格や特徴、その日の状態を知り一人ひとりの支援を考えることが大切だと思いました。
- ・「はっきりとしない思い込みとはなんですか？」という質問にギクッとしました。差別意識がないと思ってはいますが、障害者の方を目にすると避けてしまう時があります。
- ・将来は保育士という職に就こうと思っているのですが、様々な視点から人とのふれあいを学ぶことは今後自分が保育者となった時もいかしていけると思いました。
- ・施設実習にあたって本当に右も左も分からなかったけれど、少し理解することができました。
- ・自分よりも年上の人の支援はとても難しいことだと思うし、補助もうまくいかないこともあるけど、利用者さんの生活しやすいように気持ちよく過ごすことができるような環境を作ることが私たち保育や福祉関係の仕事であると感じました。
- ・今日のグループワークを通して、今まで経験したことのない援助について考えられたことは実習をするにあたってとても良い機会であったと思います。
- ・私達が障害のある人について学び、それを沢山のの人に伝えて、私達のように知らなかったことを知っていき、障害のある人が暮らしやすい環境・雰囲気を作っていくことが大切だと思いました。

### 4. まとめ・今後の課題

本講義に期待される効果を学生の目線から考えた時、「実習に対する不安を少しでも減らしたい」さらに言えば「障害者との関わり方を教えてほしい」という意見が大半であることが予測される。しかしながら、障害者支援を経験してきた教員としては、障害福祉は個別対応・個別支援が基本であるため、ひとまとめにして「障害者との接し方」を教えること自体に問題があるようにも感じている。

学生のニーズに可能な限り沿った内容となるよう努めるだけでなく、本来考えてもらいたい部分である、障害者の人権や社会参加に関する内容も講義には必要だと考える。

さらに、学生自身が保育士となった時に向き合う可能性のある事例を紹介したり、対応する方法を学んだりする機会にもしたいと考えている。しかし、それら全てを盛り込んだ講義を行うことは大変難しく、課題が残った。例えば、講義中盤で行ったロールプレイでは、「自分たちで考え、実践してみる」という点で一定の成果はあったかもしれないが、作業密度に対して時間配分が不十分であったと感じている。

来年度は、学生に特に重点的に伝えたい・学んでほしい部分をより明確化し、内容や方法についても熟考したい。

# 学生の気づき、教員の気づき —母子生活支援施設についての授業を通して—

堺 恵

## はじめに

2018年4月の保育実習指導Ⅲの授業において、筆者は、母子生活支援施設に関する講義を行った。龍谷大学短期大学部こども教育学科(以下、本学科とする)の2年生は、保育実習1(施設)と保育実習Ⅲにおいて、保育所以外の児童福祉施設での実習に臨む。母子生活支援施設は、児童福祉法第38条に基づく児童福祉施設である。そのため、保育実習1(施設)と保育実習Ⅲにおける実習先には、母子生活支援施設を含むことができる。だが、これまで本学科の学生は、母子生活支援施設に実習に行く機会がなかった。それが、2018年度からは、実習先として母子生活支援施設が含まれることになった。

「平成28年 国民生活基礎調査の概況」によると、母子世帯を含むひとり親世帯の貧困率は、50.8%と報告されている<sup>1)</sup>。つまり、ひとり親世帯で育つ子どもの二人に一人は、貧困状態に置かれていることになる。このことは、深刻な問題として各所で取り上げられている。また、警察に寄せられるドメスティック・バイオレンス(配偶者からの暴力)に関する相談件数は、増加の一途をたどっている。警視庁は、平成29年のドメスティック・バイオレンス等の相談件数を7万2,455件と発表している。この数字は、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律、いわゆるDV防止法の施行後、最も多い数字であるという<sup>2)</sup>。

貧困の中で生活することや面前で繰り広げられる暴力を目撃することは、子どもの育ちに大きな影響を与える。母子生活支援施設は、歴史的にみても、今日においても、母子世帯の子どもの貧困やドメスティック・バイオレンスという問題から、母親と子どものいのちと暮らしを守る場としての役割を果たしてきた。こうしたことを実習前の学生に少しでも理解してもらうことが、実習前の教育における課題の一つであったと思う。

筆者は、母子生活支援施設の母子支援員として働いていた経験がある。また、母子支援支援施設に関するいくつかの拙稿もある。こうしたことが、筆者が学生に向けて母子生活支援施設についての講義を行うことの契機となった。

## 1. 母子生活支援施設に関する講義の概要

筆者による母子生活支援施設に関する講義の概要は、以下の通りである。

講義日 : 2018年4月18日(保育実習指導Ⅲの授業時間内)

対象者 : 本学科2年生

講義内容： 母子生活支援施設 ―母と子の”いのち”を守るために―

1. はじめに
  2. 母子生活支援施設は
    - ① 目的
    - ② 施設数
    - ③ 職種
    - ④ 入所理由
    - ⑤ 入所している子どもの年齢
  3. 母子生活支援施設の歴史
    - ① 母子生活支援施設の始まり
    - ② 第二次世界大戦後 ―増え続ける母子生活支援施設―
    - ③ 母子生活支援施設の数にも変化が?
    - ④ 入所する母子世帯に変化が?
    - ⑤ 最近の入所世帯の動向
  4. 施設を退所した母親の語り  
―施設に入っていなかったら今ごろどうなっていたか―
    - ① 学童保育に対する評価
    - ② 幼児保育に対する評価
    - ③ 施設の行事(旅行)に対する評価
    - ④ ドメスティック・バイオレンスから避難する場所としての評価
- まとめにかえて

## 2. 母子生活支援施設に関する学生からの質問

2018年6月には、筆者の担当する児童家庭福祉の授業において、実習先の一つである母子生活支援施設の職員(少年指導員)と退所者(母親)をゲストスピーカーとして招き、母子生活支援施設に関する講演を予定していた。そのため、筆者による講義のあと、学生に対して母子生活支援施設の職員と退所者への質問を募ることにした。すると、重複したものを除いた193もの質問が、学生から寄せられたのである。この193の質問の内容は、以下のような16項目に分けることができた。

- 1 施設を運営するためのお金について
- 2 施設での規則について
- 3 施設への入所及び入所の経緯について
- 4 施設で生活する際の費用について
- 5 利用者(母親または子ども)について

- 6 利用者(母親または子ども)への支援について
- 7 ドメスティック・バイオレンスまたはドメスティック・バイオレンスへの対応について
- 8 退所者(退所者への支援、退所者の生活など)について
- 9 入所から退所までの期間について
- 10 無断で退所した世帯について
- 11 入所者の施設での生活について
- 12 施設の数について
- 13 施設の職員について(労働条件、資格要件、仕事内容、採用など)
- 14 施設の社会における認知度、認知されるための活動について
- 15 退所者への質問
- 16 その他(上記のもの以外の質問)

学生からの質問内容のほとんどは、母子生活支援施設の機能や役割、職員の仕事内容といった、母子生活支援施設に直接関係するものであった。しかし、これらのこと以外の質問もあった。それは、母子生活支援施設の職員として働くことの意味を問うような質問である。例えば、次に挙げる六つの質問がそれにあたる。

- 1 働いているなかで、苦勞したこと、楽しかったことは何ですか。
- 2 仕事をしている中で、これは辛かった、悲しかったということはありますか。
- 3 仕事をしている中で、嬉しかった、心に残ってることなどありますか。
- 4 なぜ、このような仕事に就こうと思ったのですか。
- 5 一番仕事でやりがいを感じる瞬間は、どんな瞬間ですか。
- 6 働いていて辛いと思うことはありますか。

こうした内容の質問が学生から出ることは、筆者にとって想定外のことであった。2年生となり、就職について考え始める時期と、この授業を行った時期とが重なったことが、学生からこうした質問が出た理由ではないかと推測している。

児童家庭福祉の授業内での講演を依頼した母子生活支援施設の職員には、保育実習指導Ⅲでの母子生活支援施設に関する授業を受けた学生から出された、193の質問を読んでもらった。そして、講演のなかで、退所者とともに学生からのいくつかの質問に回答してもらった。こうしたことにより、保育実習指導Ⅲという授業と、児童家庭福祉という授業との間に繋がりをもたせることが出来たのではないかと考える。筆者による講義を聞き、学生が質問を考えて文章にし、質問についての回答を実際に施設で暮らした人、働いた人から直接聞くといった流れが、二つの授業を通して出来たように思う。そして、二つの授業において母子生活支援施設を取り上げたことにより、実際に母子生活支援施設で実習する学生のみなら

ず、全ての学生にとって母子生活支援施設について学び、考えることが出来る機会を提供できたのではないかと思う。

### 3. 実習後の振り返りから学生が気づいたこと、教員が気づいたこと

本学科では、実習終了後、保育・教職実践演習(幼稚園)等の授業時間を使って、実習の振り返りを行っている。振り返りにおいては、母子生活支援施設の実習生数名も、自らの実習を振り返る報告をした。この時の学生たちの報告は、筆者にとって印象に残るものであった。

学生たちは実習中の自分たちの学びの姿勢を内省していた。学生たちのレジュメには、「どこまで踏み込んでいいのかわからず、自ら聞くことが出来なかった」であるとか、「質問や疑問点を聞く時間は取っていただけており、学ぶことはできたはずだが自ら積極的に質問することをしてなかったように思う」といったことが記されていた。つまり、学生たちは、積極的な学びをしてこなかったと反省しているのである。こうした学生たちの報告は、実習において積極的な学びをするために、実習前に何を学生に伝えておくべきかについて、考えさせられる機会となった。

また、母子生活支援施設について報告した学生たちと話すなかで、気づいたことがあった。それは、保育実習指導Ⅲと児童家庭福祉という二つの授業において、母子生活支援施設に関することを筆者が意図し、講義したことの到達点と限界、さらには母子生活支援施設に関する先行研究の問題点についてであった。こうしたことについては、ぜひとも稿を改めたいと考えている。

#### おわりに

「保育所保育指針解説」には、「外国籍家庭や外国にルーツをもつ家庭、ひとり親家庭、貧困家庭等、特別な配慮を必要とする家庭では、社会的困難を抱えている場合も多い」と記されている(厚生労働省 2019:352)<sup>3)</sup>。そして、「保護者の意向や思いを理解した上で、必要に応じて市町村等の関係機関やかかりつけ医と連携するなど、社会資源を生かしながら個別の支援を行う必要がある」とされている(厚生労働省 2019:353)。

母子生活支援施設には、「外国籍家庭や外国にルーツをもつ家庭」が入所する場合がある。『平成 28 年度全国母子生活支援施設実態調査報告書』をみると、入所理由の例として、「裁判のアシストと帰国までの居場所提供」や「難民受け入れ」、「国籍取得」が挙げられている(全国母子生活支援施設協議会 2017:109)。こうしたことから、母子生活支援施設には「外国籍家庭や外国にルーツをもつ家庭」が入所するケースがあることが窺える。

また、母子生活支援施設は「ひとり親家庭、貧困家庭等、特別な配慮を必要とする家庭」であるがゆえに、「社会的困難を抱えている」母子世帯の母親と子どもが入所している。入所者からの相談内容は、「就労課題」や「経済的課題」、「健康(精神保健を含む)課題」、「(前)

夫との課題」、「育児不安」、「子どもの行動課題(不登校・ひきこもり等)」など、多岐にわたっている(全国母子生活支援施設協議会 2017:73)。そして、こうした母親と子どもに関するさまざまな問題を支援する社会資源の一つとして、母子生活支援施設が存在する。

本学科の実習に関する教育を通して、保育者を目指す学生のなかに、様々な生活課題を抱えた母子世帯のための社会資源として母子生活支援施設が記憶に残ることになれば、とても嬉しく思う。

---

## 注

- 1) 厚生労働省 HP 「平成 28 年 国民生活基礎調査の概況」  
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/03.pdf>、2019. 2. 13)
- 2) 警察庁 HP 「平成 29 年におけるストーカー事案及び配偶者からの暴力事案等への対応状況について」  
([https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/stalker/H29STDV\\_taioujoukyou\\_shousai.pdf](https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/stalker/H29STDV_taioujoukyou_shousai.pdf)、2019. 2. 14)
- 3) 厚生労働省(2019) 「保育所保育指針解説」  
([www.ans.co.jp/u/okinawa/cgi-bin/img\\_News/151-1.pdf](http://www.ans.co.jp/u/okinawa/cgi-bin/img_News/151-1.pdf)、2019. 2. 15)

## 参考文献

全国母子生活支援施設協議会編・発行(2017)『平成 28 年度全国母子生活支援施設実態調査報告書』。

## 子どもの“生きる”にかかわる保育者の在り方 —保育指導案を通して—

齊藤真由美

本報告は、「教育実習」（2年生・水曜日Ⅲ講時）の中で担当した以下の授業を通して、年間テーマ「うまれる・育つ・生きる<いのち>」につながる学びをどのような形で伝えることができたのかを振り返る。

4月18日…指導計画案の考え方・書き方

6月6日…保育実践・実技指導（3）3歳児の保育 一部分実習の指導案作成を通して—

6月20日…保育実践・実技指導（4）4・5歳児の保育 一部分実習の指導案作成を通して—

### 1. 年間テーマ「うまれる・育つ・生きる<いのち>」につながる学び

担当する3回の授業は、いずれも部分実習の指導案を中心に展開していった。そこで、指導案における年間テーマにつながる学びとは何なのかを考えてみる。

指導案とは目の前の子どもがどのように育っているのか、どのように育ってほしいのかといった保育の方向性を踏まえたみちしるべの役割を果たす重要なものである。そして、保育とは言うまでもなく子どもの育つ・生きると日々向き合い、子どもの生きる力を育むものである。一人一人の大切ないのちを預かるという責任感をもってなされていて、豊かな育ちを育む役割を担っている。このように考えると、指導案と年間テーマとのつながりは当然のように理解できる。大きな捉え方の中でのつながりを理屈っぽく語っているように聞こえるかもしれないが、その日の指導案は、その時、その瞬間をどのように過ごすのか、つまりどのように生きるのか、そしてどのように子どもたちと保育者が共に生きるのかを記すものである。綿密に指導案を立てておかなければ、怪我を引き起こすことも、いのちの危険を引き起こすこともある。また、日々の生活、その時々環境や保育者のかかわりが子どもの生きる力の育ちに大きく影響する。つまり“育つ・生きる<いのち>”を直接的、具体的に示したものであると言える。学生が指導案に対してこのような考え方を持てるようになることが年間テーマにつながる学びであると考えた。

### 2. 授業のねらい・学生の実態・授業担当者の考え及び授業展開

#### ①授業のねらい

この3回の授業が4月や6月という時期に位置づけられているのは、教育実習（秋期）を前に指導案作成における知識をしっかりと身に付け、幼児理解を深めながら実習での指導案作成に意欲的に取り組めるようにすることが大きなねらいである。

#### ②学生の実態

ねらいを達成すべく、事前にアンケートをとり、1年生で教育実習（春期）を経験した学生の指導案作成における実態を把握することから始めた。すると、今後学びたいこととして多くの学生が指導案の書き方そのものをあげていて、書き方のポイントや、ど

ここまで詳しく書くのかを質問する学生、いろいろな分野の指導案が欲しいと作成されたものに頼るような学生の姿が目立った。つまり、学生は上手く書ける方法やすぐに役立つ指導案を知りたいのだと思われた。

### ③授業担当者の考え及び授業展開

授業のねらいは、上記で述べたように「指導案がうまく書けること、スムーズに書けること」ではなく、「意欲的に作成しようと思うようになること」である。つまり、見本となる指導案を数多く提供したり、パターン化した考え方を身に付けさせようとする授業展開を考えてはいない。保育者としての重要な役割である指導案作成の必要性を理解した上で、子どもとのつながりの中で、**生きる・育つ**に自分がかかわっている喜びを感じながら作成しようとすることを重視している。これは、年間テーマともつながる学びである。また、学生にとって実習やその後の経験に必要な学びであると考える。そこで“指導計画の考え方・書き方”の授業では、指導計画案作成に必要な知識をしっかりと伝えつつ、下記の内容を保育経験者である私の実感として主張した。

- \*指導案作成は、自分にとっての大変さを思うよりも、子どもたちがよりよく成長していくために、なくてはならないものであること（必要性・意義・役割）をしっかりと理解することで、進んで取り組むことができるのではないかな。
- \*子どもたちの大切な時間を共に過ごすことができる、共に生活を作っていくことができる喜びを感じることができたら、指導案を楽しむ気持ちが持てるのではないかな。
- \*子どもたち一人一人が楽しんでいる姿、心動かしている姿を思い浮かべながら作成すれば、どのように書けばよいのかと悩むよりも子どもたちの思いや考えを理解した内容が書けるのではないかな。

その後、担当者が作成した3歳児クラスの部分実習の指導計画案「集団遊び・ねことねずみ」を配布し、指導案の各項目について、書き方だけに留まらず、なぜこのようなことを書いているのかに重点をおいて具体的に伝えていった。

“保育実践・実技指導（3）3歳児の保育”では部分実習の指導計画案「おひっこしゲーム」を、“保育実践・実技指導（4）4歳児の保育”では部分実習の指導計画案「やきいもゲー・チー・パー」を、5歳児の保育では部分実習の指導計画案「椅子取りゲーム」を何れも授業担当者が空白部分を残して作成し、空白部分を学生が考えたり、グループで話し合ったり、いくつかのグループが発表したり、実際に行ったりする機会をつくった。

例えば、「やきいもゲー・チー・パー」では、「二人組になることを急がず全員が二人組になるまで見守る」のはどうしてなのかを尋ねたり、「自分の好きな友達を奪いあった時はどうするのか？」を実際に子どもにかけられる言葉や行動で示したりする機会をつ

くった。また「ジャンケンで決める」と言った学生には、「勝った子どもの気持ち、負けた子どもの気持ちはどうだと思う？」と、さらに深く尋ねたりした。どうすれば子どもが楽しんで遊んでくれるか、混乱なく進めることができるかとその方法を考え出そうとするのではなく子ども主体で考え、一人一人の子どもを思いやることの大切さに気づいて欲しいと考えた。それが、子どもの“生きる・育つ・くいのち”にかかわる保育だということを学生が感じ取れるように授業を進めていった。

### 3. 今回の反省と今後の課題

担当した3回の授業が実習に役立つものであったのか、年間テーマにつながる学びがあったのかどうかを学生に尋ねる機会をもっておらず、授業を学生の意見から評価することは難しいが、他の担当授業である保育内容Ⅰ「健康」での学生のアンケートから気づかされたことに大きな意味を感じたので、その気づきをもって今回の反省、今後の課題としたい。以下では、学生によるアンケート内容のいくつかを示すと共に、アンケートから気づかされたことについて記す。

#### アンケート“保育内容Ⅰ「健康」の授業を終えて”より

- ・一人が「生きる」というのは、一人ではやっていけない。だれかの助けがあるから生きていける。そのことを忘れず、感謝して生きることの重要性を学ぶことができました。
- ・人が生まれて、育つ段階には、身近な大人の影響が大きいと気づいた。
- ・いのちの重みがよく分かるようになったと思います。今まで、私は知らないうちに、自分の命を乱雑に扱っていたかもしれません。
- ・水曜日の授業で見た映像とかも全て含めて、今こうして生きていることにすごく嬉しい気持ちと、頑張りたいとかそういう気持ちと、今を存分に楽しもうって気持ちでいっぱいになります。嫌なこととか苦しいこととか、これからも絶対にあると思うけど、そういう困難に出会えるのも生きているからこそだと思ふし、もし壁にぶちあたったとしても、この気持ちを思い出して堂々と立ち向かおうと思いました。
- ・ひとつの命があってそれは周りの人からの支えが大きいと知りました。その役目が保育者にはあって見守り続けることが保育者には必要だと感じました。
- ・一人一人の命を預かっていることを忘れず、子どもたちを見守ることのできる保育者になりたい。

#### ①気づき その1

授業担当者の思いとして、保育者を目指すあなたたちには、子どもの「うまれる・育つ・生きるくいのち」にかかわる学びをして欲しいのだ、ということ进行全面に出すのではなく、学生自身が生まれ、育ってきて、今生きていることに思いを馳せ、身近な人

に支えられてきたことに気づいたり、感謝したりできるようにすること、そこを大事に考えるべきであったと思った。大切に育ててもらったという思いや喜びや、今生きているという実感があるからこそ、これからは、子どもたちの**育ち**を支えていこう、**命**を守っていこうと自分の在り方を考えることができるのだと思う。学生に保育者としての大切なことを学ばせたいという思いだけでなく、その前に、これまで**育てられて**きた学生が、保育者として、社会の一員として、今、自分が子どもの**育ち**を支えようとしていることに気づき、成長していく年齢、その立場にあるということをもっと理解すべきだったと気づかされた。

## ②気づき その2

年間テーマをねらいにした一連の授業・映画鑑賞・講演・実習は、全てがつながっていることはいうまでもない。自分が担当する授業、今回では指導計画案を通しての授業の中で、年間テーマに対する学びがあったかどうかではなく、知識として身についたこと、記憶に残ったこと、心動かされたことがあったかどうかを問うべきであった。それが、その後の学生の、生活の中での様々な経験とつながり、広がったり、確かな学びとなったりしていくのだらうと気づかされた。

## からだで感じる遊びの大切さ —模擬保育を通して—

野澤良恵

### 1. 目的

本取り組みの目的は、指導案からその内容を実施する様子を学生に観察・体験してもらうことである。これまでも実習事前指導において、保育指導案を立案する授業は様々な形で実施してきた。しかし、保育の知識や経験が不十分な学生にとって、指導案の立案だけでなく、その実施も難しいと感じていることが、学生の実習後の振り返りなどからもわかった。

そこで、教員が保育者になって実施する模擬保育において、学生が子ども役で参加する中で、具体的な指導方法や保育者の援助について体験を通して学ぶ事を目的とした授業を行った。

### 2. 概要

対象者：1年生 142名、2年生 136名

実施日：2018年9月26日(水)2018年10月6日(水) (1年生)

2018年5月2日(水)2018年5月9日(水) (2年生)

実施場所：柔道場

教員が保育者役、学生が子ども役もしくは模擬保育の観察者になった。各学年を半分の人数に分けて、同じ内容の授業を二回ずつ実施した。なお、1年生と2年生で、異なる模擬保育を設定した。

#### 1) 1年生の取り組み(科目：保育実習指導Ⅱ)

教育実習(春期)、保育実習Ⅰ(保育所)に臨む1年生を対象とした。保育経験のない学生が初めて部分実習を行う為の保育指導案を立案するにあたり、具体的なイメージを持てる様、教育実習(春期)の期間である「2月の4歳児」を想定し、取り組みやすい室内での集団遊びの模擬保育を行った。

模擬保育を行う前に、学生、教員全員で、音楽に合わせて、からだを動かして、ふれあい遊びをした後、模擬保育の子ども役として20名を選出した。子ども役の学生に対して模擬保育を行い、それ以外の学生を保育の観察者とした。模擬保育では、「ひっくり返しゲーム」という子どもを二つのチームに分け、地面に撒かれた表と裏の色の違うカードを、制限時間内に自分の色側にひっくり返すゲームを行った。

約30分の模擬保育の後は、10名程度のクラスに分かれ模擬保育を振り返り、グループ全体で学びや気づきを共有した。学生それぞれの感想は、コメントシートに記入した。

## 2) 2年生の取り組み(科目:教育実習)

1年生で初めての実習を経験し、保育実習Ⅰ(施設)、保育実習ⅡⅢ、教育実習(秋期)を控えた2年生に向けての模擬保育を行った。2回目の実習では、部分実習の機会を与えられる学生がさらに多いことが予測された。その為、2週間という短い実習期間の中で任される部分実習であっても、子どもにとって大切な成長の時間である事を忘れず、1年生で経験した実習をふまえて、健やかな成長発達に即した遊びを立案する事の大切さを考えられるよう、「10月の4歳児」の指導計画やねらい、子どもの姿を考慮した模擬保育を設定した。実施した模擬保育は、「おいも鬼ごっこ」という鬼にタッチされるとさつまいもになって静止し、友達にタッチされると再び動くことが出来る氷鬼形式の鬼ごっこを行った。

1年生と同様、学生と教員全員で、ふれあい遊びでからだを動かし、簡単なゲームで子ども役(各クラス3名×7クラス21名)を選出した。子ども役の学生に対して模擬保育を行い、それ以外を保育の観察者とした。

約30分の模擬保育の後は、10名程度のクラスに分かれ模擬保育を振り返り、グループ全体で気づきや学びを共有した。学生それぞれの感想は、コメントシートに記入した。

## 3. 受講生の声(コメントシートより抜粋)

### 1) 1年生の感想

- ・実際に身体を動かし、間近で保育の実践を見ることが出来て、とてもワクワクし、楽しかったし、とても勉強になった。実習で挑戦してみたい。
- ・見ているとスムーズに活動が進んでいるように見えるが、その裏には多くの保育者の工夫や配慮があることに驚いた。
- ・普段、大学生活の中では、友達と手を繋ぐことも一緒になって走り回る事もないが、いざしてみるととても楽しいものだと思った。手を繋ぐことは、スキンシップであり、子ども同士、あるいは保育者と子どもの親睦を深めるためには、直接的な触れ合いが大切であると思った。

### 2) 2年生の感想

- ・子ども役をしました。少しずつルールが増えていくことで、ルールがわかりやすかったし、もう一度やりたいという子ども心を感じる事が出来ました。おいもになっても友達にタッチしてもらおうと生き返ることが出来て、仲間意識や思いやりが得られると共に、普段は話さない友達とも関わる事が出来「ありがとう」という言葉が飛び交っていてよいと思いました。
- ・お芋ほりの体験を振り返り、その経験を基に新しい遊びに繋がられていて、お芋ほりを一つの行事として終わらせるのではなく、次の楽しさへ発展させていることを感

じました。遊びの説明や準備も作業ではなく、子ども達が常に一緒に遊んでいるのだという感覚が持てるように工夫されていました。

#### 4. まとめ

模擬保育を通して、学生は子ども役、観察者双方の視点から、様々な場面で気づき、学んでいることが各クラスの発表やコメントシートから読み取ることが出来た。

それらの多くは、保育者役の教員が行った保育の導入や展開の仕方、態度や配慮、環境設定の工夫、場面に応じた言葉がけや声のトーンの違い等の具体的な気づきが目立った。子どもに向きあう保育者を間近で感じ、保育を体験したことにより、講義形式と違った学びを実感している様子が見受けられた。

また、一緒にからだを動かして遊んだ体験の中で、保育者に声をかけられ認められることの喜びを感じ、保育者の言葉がけや援助の一つひとつにねらいがあると気付いた学生もいた。

それらはすべて、理論を学んでいるからこそ、体験をしたことでより明確に理解することに繋がったのだと考えられる。

模擬保育の前に全員で行ったふれあい遊びは、歌や音楽に合わせて一人で歩くことから始まり、二人組、三人組と次々に相手を探すことで心は揺れ動き、手を繋ぐことで相手の力を感じ、自分の力が相手にどう伝わるかを考え、心とからだが大きく動く事を体感できる遊びだと考える。今回の授業では、みんなで一緒にからだを動かし、楽しさを心で感じ、学ぶ機会となった。

ただし、教員が模擬保育を行う事で、保育経験の浅い学生が、具体的な保育の展開方法や援助等を知り学ぶという効果はあったと思うが、模擬保育の内容を学生自身が取り組みやすいと安易に真似て、目の前にいる子どもの姿を考慮せずに、実態とかけ離れた子ども主体ではない保育指導案を立案してしまうのではないかという懸念は残った。また、子ども役の学生には当日に「4歳児」になるよう伝えた為に、4歳児の成長発達を考慮して子ども役を行うことはできず、教員が模擬保育を実施しやすいように4歳児になりきることなく、普段通りに動いていたことも考えられる。子どもと関わる機会が少ない学生にとって、子どもの姿を想像することは難しいことが予測される。ゆえに、学生が「子どもの姿」の大切さに気づき、子どもの実態に即したねらいや内容を考えられる様、「子どもの姿」を考慮したプログラムを入れることも、次年度以降に講義を行う際の課題としたい。

これから、様々な人工知能の発達により、今よりもっとからだを使わなくなったり、考えなくなったり、人と関わり合う機会が減ると言われている。

未来を生きる子ども達の豊かな人間性を育む為にも、からだを動かす事を億劫と思わず、からだを動かして遊ぶ事の楽しさや、人と関わって過ごす事の面白さやすばらしさを、子どもと共有し伝えられる保育者になってほしい。

2018年度は、「うまれる・育つ・生きる<いのち>」というテーマで、「いのち」について考え、大切にしている実習指導を様々な形で行ってきた。今回の模擬保育を通して得た気づきや学びの一つひとつも、子どものいのちを大切にすることに繋がると考えている。

これからも、大切ないのちを育む保育者を目指す学生が、誠実に子どもと向き合えるよう、具体的で深い学びの実現に向けて検討していきたい。

## 実習生の意識の変容を促すマナー指導

土井由美

実習事前指導の講義の中で、実習に行く学生にはマナーについての講義を設けている。電話のかけかた、お礼状の書き方等に加えて、90分授業の半分ぐらいをマナー全般について話す。これはその講義の報告である。

例年、実習から戻った学生達の振り返りの中に、次のような声がある。

- ・挨拶をしているのに、「挨拶が出来ていない」という評価を受けた
- ・わからないことを質問しようとしたけれど、忙しそうで聞けなかった
- ・一生懸命子どもと関わっているつもりなのに、関わっていないと評価された
- ・子どもに関わりたいのに、雑用ばかりさせられた、等

これらは、一方的に「自分は悪くない」という学生達の未熟な考えから出ている発言ではあるが、相手の立場になって、自分がどのように受け取られているのかを客観的に振り返ろうとする視点があれば、自分の態度をもう少しその期待に応えられるよう配慮するようになるのではないか。こうした視点をもとに、以下の2点を目標とした講義を行った。

- ①学生はその意識を変えていくこと
- ②そのための技術的な方法を伝えること

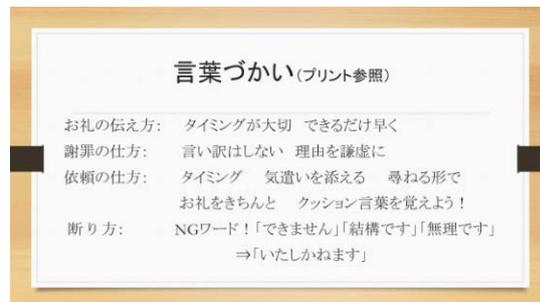
この2点を学生が身につけることで、実習先の指導者とのコミュニケーションがうまく取れるのではないかと考えた。

まず、「マナー指導」と聞くと、それだけで堅苦しく感じて耳を閉ざしてしまう学生も多い。①の学生はその意識を変える事、つまりは「相手には相手の思いがあり、受け取り方がある」という他者の視点があることに気づくこと。そして「そのことにかかわる人々がどう思うか」について配慮することが大切であると知ること。ここでは、マナーとは何か？何故マナーが必要なのか？マナーのいい人とはどんな人を指すのか？自分はどのような人になりたいのか？などについて話しながら、学生自らが、期待される実習生像を想像し、自分らしく在りながらもそこに配慮出来る人になってもらいたいという思いがある。

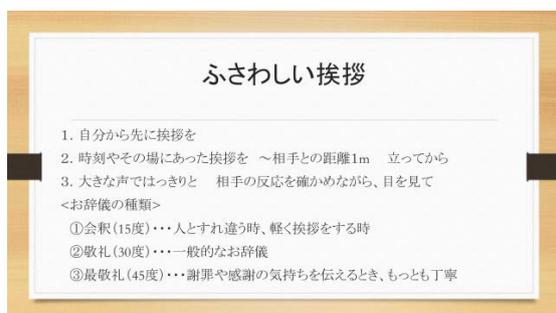
②では具体的に、「相手に心が届く挨拶の仕方」や、忙しい時にでも聞いてもらえるための「クッション言葉の使い方」など、具体的な技術を伝えることで、「型」を覚えコミュニケーションをうまく取れるように指導した。以下に、講義に使用したパワーポイントの例を数枚提示する。



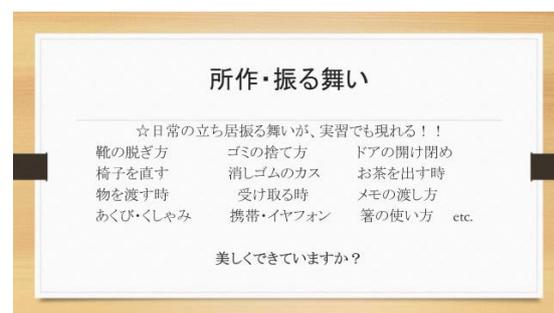
<タイトル>



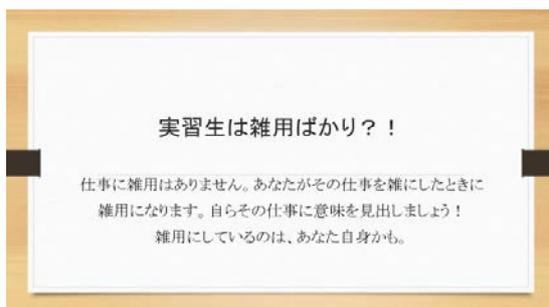
<クッション言葉など>



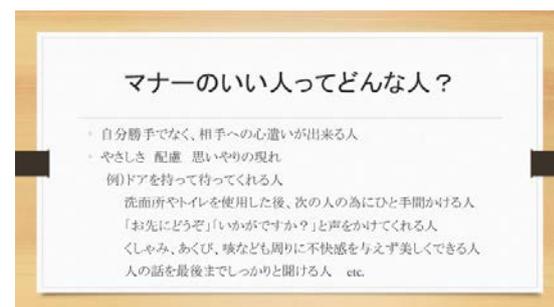
<挨拶の仕方について>



<細やかな配慮の為の具体例>



<雑用について考える>



<マナーのいい人への気づき>

今年度この授業の核となった『生まれる、育つ、生きる<いのち>』というテーマを考えた時、「学生も今、ここに生きている」わけであり、実習中は「実習生として」生き生きと生きてもらいたい。その為には、「実習に行かされる」というような甘えた学生の態度から、実習後に「是非一緒に働きたい」と声をかけられるような「社会人として責任の

ある保育実習生」へと自ら進んで気持ちを切り替えてもらう必要性があり、その為の気づきを促す講義にする必要性を感じていた。講義中、「雑用ばかりさせられた」という先輩の振り返りを例に出し、「雑用という仕事はありません。自らがその仕事を雑にした時に、雑用になります。掃除であっても、単純な作業であっても、その背景にいる子どもの為に思いを込め、仕事に意味を見出すことで雑用ではなくなるはずですよ」という話をすると、「そういう話を初めて聞きました。その通りだと思います、自分から雑用にしないようにします」という感想があり、気づきに繋がったと感じた。一度こういう話をしておくと、実習中、学生に出会った時にも、「仕事を雑用にしていますか？」と聞くと、「はい！」とにっこり笑って答えてくれる。そのように考えられる為の援助は、事前指導の中で我々教員側が出来る事であろう。

講義を終えての反省は、学生自らが考えたり、話し合ったり、実際に練習してみたりする時間をもう少し長く取って、学生がしっかりと気づき、納得し、安心して実習に向かえるように援助できる講義にするべきだということである。その為には、十分な講義時間の確保とプレゼンテーションの方法を工夫すること、講義を聴いた後の学生に変容があったかどうかの感想を聴くなどして、次回に繋げる事が大切である。

学生の気づきを促すことは、しっかりとこちらの届けたいメッセージが届いていなければ起こらない。個性のある一人一人、全員に届くということは難しい。しかし、試験の後、消しゴムから出たごみを手のひらに集めて退室していく学生を見かけると、どこかでこういった話を聞く事は、「配慮が出来る人への育ち」として必要であると感じている。

## 実習サポート講座 ～名札づくりにチャレンジしよう！～

辻 友理、松原 亜朋衣、中原 巳紗子、田岡由美子

### 1. 概要

|      |  |
|------|--|
| 講座名  | 名札づくりサポート講座  |
| 実施日  | 2018年12月12日(水) 13時15分～14時45分<br>2019年1月9日(水) 13時15分～14時45分 |
| 場所   | 深草キャンパス 21号館402教室  |
| 対象   | 短期大学部こども教育学科 1回生   |
| 参加人数 | 2018年12月12日(水): 45人<br>2019年1月9日(水): 62人                   |



### 2. 名札づくりの意義

初めての实習参加の準備として、名札づくりが挙げられる。実習巡回で園を訪問すると、多くの学生が思い思いに工夫を凝らして作成した名札をつけている。いずれも学生の名前や絵本の一場面、さらに果物や動物などをフェルトで縫い付けたものであるが、デザインや色などどれ一つ同じものはない。その意味で手作りの名札は学生自身を表していると言えよう。

名札づくりの意義は、第一に実習生である学生が子どもに早く名前や人となりを知ってもらうことである。たとえ子どもたちが字を読めなくても、手作り名札の絵やデザインを見ることによって「〇〇先生」と親しみを持って名前を知ってもらうことができる。また上手、下手を問わず手作りの名札は温かみがあり、その人ならではの味がある。そのため、名前と共に、実習生の特徴、人柄も子どもたちに伝わりやすい。

第二に、手作り名札は、子どもと話をするきっかけとなる。初めての実習は、学生にとって、緊張から自分から子どもに声をかけづらい。そのようなときに、名札に描かれている絵に親しみを持って子どもから声をかけてくれ、話の糸口を見つけることを可能にする。名札は学生と子どもが親しくなるきっかけを作ることに役立つ。

第三に、学生同士集っての名札づくりは、実習が始まる前の高揚感や、仲間と一緒に頑張ろうという連帯感をもたらす。さらに、実習で失敗したときや思い通りに行かず心が折れそうなときに、同じように実習に参加している仲間の存在を思い出し、仲間も同様に頑張っていることに思いを馳せることができる。手作り名札は、学生の気持ちを実習に向けて高め、さらには実習中に学生を励ますこともできる仲間といえよう。

今回の名札づくりの指導は、実習指導室の辻、松原、多目的室の中原の3名の職員で行われた。慣れない手つきで糸を通し、針を進めていく学生、色やデザインを友達と一緒に考える学生、出来上がった名札を見せ合う学生など様々な学生たちを、実習先で子どもた

ちといい関係を紡ぎ、実りある実習になりますようにと願いつつ支え・励ます教職員によって、実施された活動である。以下、名札づくりの様子を写真で示す。

### 3. 講座の様子



4. こんなの作りました！



## 自分を大切にするために

赤澤 正人

こども教育学科の学生は、学内での学びだけでなく 5 つの実習を経て、それぞれの夢や目標に向かってひたむきに頑張っている。学生生活の中で、やはり実習、中でも初めての実習は大きなストレスになることは想像に難くない。また、2年間という短い期間で次のステップに進むことになる学生の不安も大きなものになると思われる。そうした中で、ストレスと上手につきあって身体だけでなく心も健康を保つこと、そして自分を見失わずに人間的な成長を続けていくことは大きな課題といえる。

学生にとって、実習や新しい生活は環境と生活に大きな変化をもたらす。それらはストレスとなって、心身両面に様々な影響を及ぼすことがある。ストレスが自分で対処可能であったり、適度なものであったりした場合には、やる気やパフォーマンスの向上といったポジティブな結果にもつながる。一方で、ストレスが自分にとって過度なもので対処が困難であったり、周囲からのサポートが得られなかったりした場合には、食欲不振や不眠、集中力や意欲低下、不安や緊張、飲酒量の増加といった、心身にネガティブな影響（ストレス反応）を及ぼすことになる（図 1）。

ストレスをゼロにすることはほぼ不可能であるから、ストレスをうまく管理していくこと（ストレス・マネジメント）が求められる。ストレスから自分を守ったり、対処したりする様々な方法をコーピングという。例えば、解決策を調べたり、人に相談したりといった、ストレスの原因そのものを軽減させようとする方法がある。また、音楽を聴いたり、美味しいものを食べたり、仲間と気持ちを共有し合ったりといった、ストレスによる心理的な反応を軽減させようとする方法もある。こうしたコーピングは、一人でできることには限界があることに留意しておく必要がある。もちろん個人で頑張ることも大切であるが、自分一人で抱え込まずに周囲に頼る、相談することもストレスに対処するうえでとても大切なことである（図 2）。また、自分の中で確立されているコーピングを活用することにこだわりすぎずに、コーピングにバリエーションを持たせてみることも重要である。



図1 様々なストレス反応

ストレス耐性を活用しよう

- ・ ストレスから自分を守ったり、対処したりする様々な方法  
→ **コーピング**

例えば・・・解決方法を考える、人に相談する、運動をする、音楽を聴く、自分で自分を励ます、愚痴りあう、攻撃的になるなど

- ・ 家族や友人からのサポートもストレス耐性に重要

ストレスと上手に付き合うだけでなく頼らずに独りで頑張る

図2 ストレスへの対処

ストレス・マネジメントの方法の一つに、リラクゼーションがある。リラクゼーションはストレスで高まった脈拍や緊張状態をリラックスすることによって落ち着かせ、不安などを軽減させるものである。リラクゼーションの代表的なものとして呼吸法や筋弛緩法を講義の中で紹介した(図3、図4)。これらは、心身の安定化を図る容易な方法であり、時間や場所を選ばずに実践することが可能である。最初はうまくいかないこともあると思われるが、繰り返し練習し実践することによって、リラックスの効果を得ることができる。今後生活の中で、つらくなった時や気持ちを落ち着かせたい時などに、こうしたリラクゼーションを取り入れてみてほしい。

リラクゼーション(呼吸法)

- ① 楽な姿勢をとってください(できれば目は閉じましょう)。
- ② 鼻からゆっくり息を吸いましょう。そんなにたくさん吸わなくても大丈夫です。
- ③ 口からゆっくり長く息をはきましょう。  
「1・2・3・4で吸って、5・6・7・8・9・10・11・12で口からはいて…」のペースでしばらく繰り返します。
- ④ 息をはく時に、心の中で、「リラックス」、「だ〜いじょ〜ぶ」と語りかけてみましょう。
- ⑤ 5回ほど繰り返します

図3 リラクゼーション(呼吸法)

リラクゼーション(筋弛緩法)

- ① 楽な姿勢をとってください(できれば目は閉じましょう)。
- ② こぶしをギュッと握ってください(痛くない程度、70~80%の力でじゅうぶんです)。
- ③ 一気にガラ〜んと力を抜いてください。
- ④ 「1・2・3・4で力をいれて、5・6・7・8・9・10・11・12で力を抜いて…」のペースでしばらく繰り返します。
- ④ 筋肉が緊張した感じと緩んだ感じを味わってみましょう。

(注意) 肩、お腹、足などいろいろな部位でできますが、痛めていたり違和感を感じたら中止してください

図4 リラクゼーション(筋弛緩法)

学部を卒業して社会に出ても、新しい生活を始めても、様々なストレスにさらされることになるだろう。そして大人として、自らを管理していくセルフ・マネジメントが大切になってくる。セルフ・マネジメントは、心身の健康管理(ストレス・マネジメント、セルフ・ケア)だけでなく、感情のコントロールや、モチベーション、課題への取り組み、円滑な人間関係の構築など、自分自身を高めていくために、自分を律していく力・能力といえる(図5)。

セルフ・マネジメントを高める方法として、①具体的で小さな目標を立てて、成功体験を積み重ねる、②感情をコントロールし、視野を広げる、③自分の強みや価値観を知り、課題に活かす、④自分自身としっかり向き合い、自分のパフォーマンスを省察する、といった4つの大切な視点を紹介した。もちろんこれらは簡単にできるものではないし、一朝一夕に身につくものでもない。ある程度時間をかけて育てていくものであるので、とらわれ過ぎないようにしてほしい。

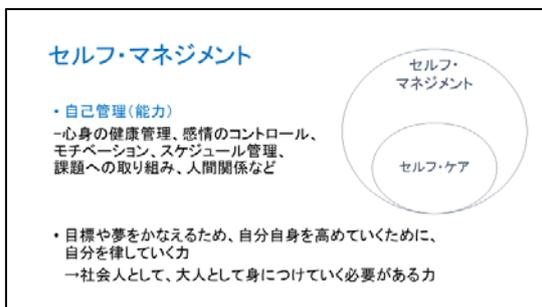


図5 セルフ・マネジメントとは

ここまで筆者が水曜の授業で担当した講義について簡単に概説した。学生の皆さんが自分を大切にすることの重要性やその方法に気づいて、実践してもらえることを願っている。

# 2018年度「うまれる・育つ・生きる<いのち>」プロジェクト 最終アンケート結果報告

松溪 智恵

## 1.目的

2018年度は、幼稚園教諭と保育士の両免許状取得を目指す学生に対して「うまれる・育つ・生きる<いのち>」を年間のテーマとし実習指導を行った。本調査の目的は、1年を通してひとつのテーマを継続的に取り扱うことに対する満足度を測定することに加え、その中で印象深かった活動について、学年ごとに把握することである。

## 2.調査方法

### 1) 調査方法・日時

自記式のアンケートを用い、無記名方式で実施した。

なお実施日時は2019年1月9日2講時と、1月16日1講時であった。

### 2) 調査項目

満足度を測定する質問として「本プロジェクトに参加して満足度はどうでしたか」という項目を設定した。回答は「①とても満足した」から「⑤不満である」という5件法を用いた。選択肢は、集計時に「①不満である」から「⑤とても満足した」へ反転させて分析した。

印象に残った活動を把握するための質問として「一番印象に残った活動は何でしょうか」という調査項目を設定した。印象に残った活動に関しては、印象に残った順番に3つ選択する形式を採用した。項目は「映画『うまれる』の鑑賞」、「助産師 内田美智子先生の講演」、「おいでよ ちびっこまつり」、「映画『ずっといっしょ』の鑑賞」、「授業内で佛教讃歌を歌う」、「実習振り返り報告会」の6つで、「おいでよ ちびっこまつり」に関しては2回生のみ対象とした。

さらに自由記述の形式で、本プロジェクト全体を通しての感想を記入する項目を設定した。

### 3) 調査対象

プロジェクトに参画した学生を対象とした。具体的には、こども教育学科2017年度入学生（以下2回生）で前期に「保育実習指導Ⅲ」と「教育実習」、後期に「保育・教職実践演習」受講した学生134名と、こども教育学科2018年度入学生（以下1回生）で前期に「保育実習指導Ⅰ」後期に「保育実習指導Ⅱ」を受講した学生141名である。回答数は260で、回収率は94.5%であった。

#### 4) 集計・分析方法

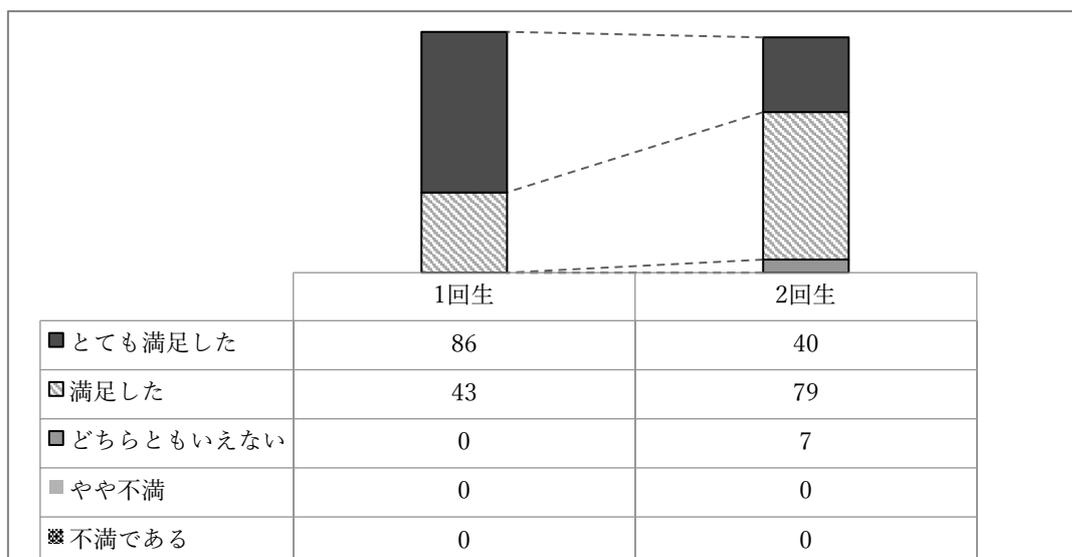
「本プロジェクトに参加して満足度はどうでしたか」と「一番印象に残った活動は何でしょうか」の2つの項目いずれに対しても単純集計を行った。その上で、「本プロジェクトに参加して満足度はどうでしたか」という項目に対しては平均値を算出し、1回生と2回生の平均値の差についてt検定を行った。なお、学年不明の4つのサンプルについては分析の対象外とした。

### 3.結果

#### ① 学年

|     | n   | %    |
|-----|-----|------|
| 1回生 | 130 | 50%  |
| 2回生 | 126 | 48%  |
| 不明  | 4   | 2%   |
| 合計  | 260 | 100% |

#### ② 「本プロジェクトに参加して満足度はどうでしたか」

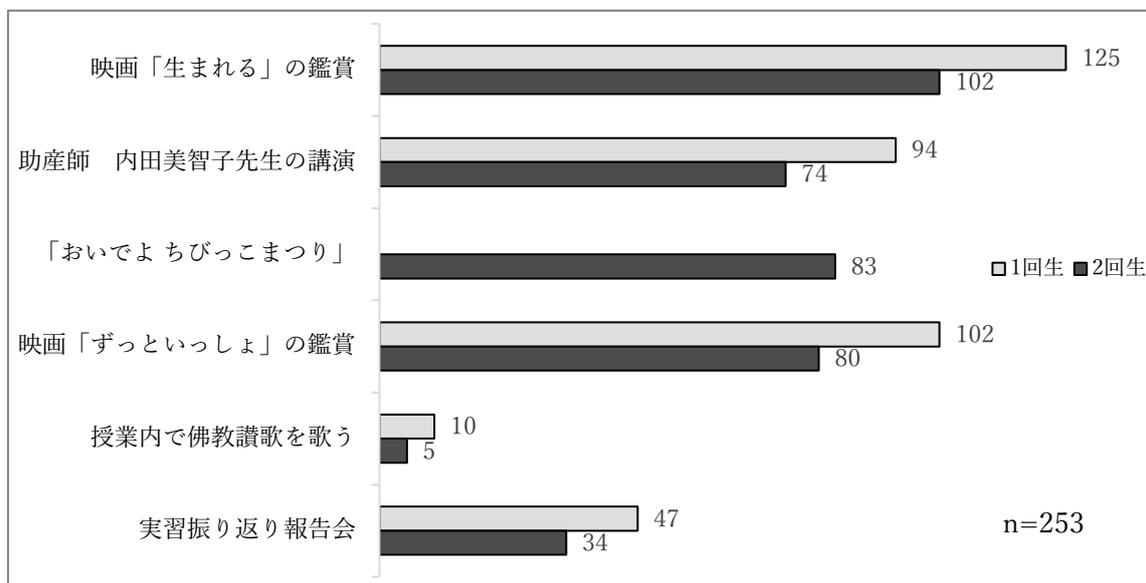


プロジェクトに参加して「とても満足した」と回答する学生が最も多く、1回生で86名、2回生で40名であった。次が「満足した」と回答した学生で、1回生で43名、2回生で79名であった。「どちらともいえない」と回答した学生は、1回生は0名、2回生が7名であった。両学年とも「やや不満」「不満である」という回答をする学生がいなかった。各学年の満足度の平均を算出したところ、1回生が4.63(標準偏差0.47)、2回生が4.26(標準偏差0.55)であった。平均の差が統計学的に有意かどうかt検定を実施したところ、0.1%水準で有意であった。

③ 「一番印象に残った活動は何でしょうか」

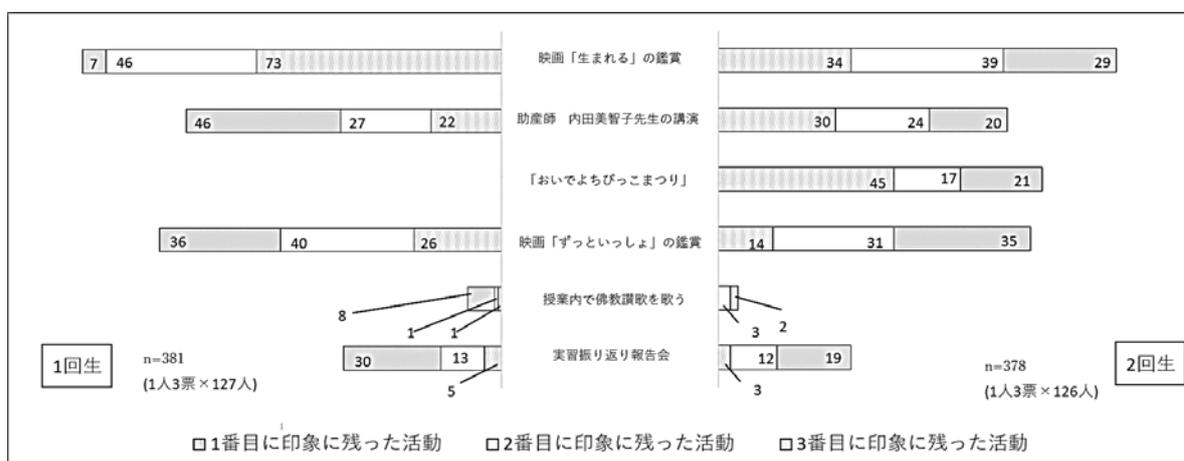
1 回生 130 名、2 回生 126 名、計 256 名集計、うち不備により 1 回生から 3 名分のデータを分析対象外とした。

複数回答をまとめ、学生がどの活動を選んだかという総数を表に示した。



最も得票数が多かったのは両学年ともに「映画『うまれる』の鑑賞」で、1 回生が 125 名、2 回生が 102 名の学生が 1 番目から 3 番目のいずれかの印象に残った活動として回答した。その他を活動が得票数を多い方から見ると、1 回生では「映画『ずっといっしょ』の鑑賞」が 102 名、「助産師 内田美智子先生の講演」が 94 名、「実習振り返り報告会」が 47 名、「授業内で佛教讃歌を歌う」が 10 名であった。2 回生は「おいでよちびっこまつり」が 83 名、「映画『ずっといっしょ』の鑑賞」が 80 名、「助産師内田美智子先生の講演」74 名、「実習振り返り報告会」が 47 名、「授業内で佛教讃歌を歌う」が 5 名であった。

以下は、各選択肢の順位ごとの獲得票数の内訳を示したグラフである。



1 回生で「映画『うまれる』の鑑賞」を 1 番印象に残った活動として選んだ学生は 73 名、2 番目として選んだ学生は 46 名、3 番目として選んだ学生は 7 名であった。2 回生においては、それぞれ 34 名、39 名、29 名であった。1 回生で「助産師 内田美智子先生の講演」を 1 番印象に残った活動として選んだ学生は 22 名、2 番目として選んだ学生は 27 名、3 番目として選んだ学生は 46 名であった。2 回生においては、それぞれ 30 名、24 名、20 名であった。2 回生のみの項目である「おいでよ ちびっこまつり」を 1 番印象に残った活動として選んだ学生は 45 名、2 番目として選んだ学生は 17 名、3 番目として選んだ学生は 21 名であった。1 回生で「映画『ずっといっしょ』の鑑賞」を 1 番印象に残った活動として選んだ学生は 26 名、2 番目として選んだ学生は 40 名、3 番目として選んだ学生は 36 名であった。2 回生においては、14 名、31 名、35 名であった。1 回生で「授業内で佛教讃歌を歌う」を 1 番印象に残った活動として選んだ学生は 1 名、2 番目として選んだ学生は 1 名、3 番目として選んだ学生は 8 名であった。2 回生においては、0 名、3 名、2 名であった。1 回生で「実習振り返り報告会」を 1 番印象に残った活動として選んだ学生は 5 名、2 番目として選んだ学生は 13 名、3 番目として選んだ学生は 30 名であった。2 回生においては、3 名、12 名、19 名であった。

#### 4.まとめ

上記でまとめた結果に自由記述の内容を加え、まとめとしての考察を行いたい。

##### 1) 本プロジェクトへの満足度の分析結果から

ほとんどの学生が「とても満足した」「満足した」を選んでしたが、2 回生では 7 名が「どちらでもない」と回答していた。「どちらでもない」を選択した学生の自由記述欄を見ると、「ちびっこまつりの時期がとても忙しく大変すぎた」や「ちびっこまつりはもう少し計画して行った方が良くと思います」など、「おいでよ ちびっこまつり」の活動に対する不満を記述する学生が半数であった。さらに、満足度が高かった学生でも「ちびっこまつりは満足できていない」と記入する学生が見られた。このことから、「おいでよ ちびっこまつり」について、学生に負担感が残ったという側面が明らかになった。その一方で、印象に残った順位の内訳をみると、一番印象に残った活動として選択されている割合が最も高いのもまた「おいでよ ちびっこまつり」であった。これらのことから、学生が負担に感じる面はあったものの、印象に残る活動であったことも指摘できる。次年度以降の実施にあたっては、学生が負担に感じた実施時期等を検討したうえで取り組むことが求められる。

なお、1・2 回生ともに「とても満足した」「満足した」に回答が偏っている点について、単純に満足度が高かっただけでなく、授業時間内でアンケートを実施し教員が直接回収するという調査形式であるために、教員の望みそうな回答をしたとも考えられる。このような影響を除外するため、実施形式や回収方法等についての検討も必要である。

## 2) 印象に残った活動の分析結果から

印象に残った活動としては、1回生・2回生ともに映画鑑賞が上位を占めた。このことから、次年度以降も映画を活用していくことの有用性はあると考えられる。

しかしながら、映画を選択した学生の中でも、「『うまれる・育つ・いきる<いのち>』というのを意識しながら活動することがあまりできていなかったように思う」ということを自由記述で述べている学生もいた。つまり、教員側としては映画の題材がプロジェクトのテーマに沿っているものを選択していたが、学生には教員側の意図や他の授業内容との関連性が十分に伝わっていないことが示唆された。次年度以降の実施にあたっては、映画が印象に残りやすいということを活かして他の授業でも活用することで、より効果的になると考えられる。活用例としては、授業の導入部分で映画の内容を活用するだけでなく、学生同士のディスカッションのテーマに使用することで学びをより深めるなどが挙げられる。